天理市埋蔵文化財調査報告　第１集

前　栽　遺　跡

―縄文時代晩期遺跡の調査―

1984

天理市教育委員会

図版1　前栽遺跡　航空写真（カラー）

序　　文

学校教育法に基づく，学校整備事業の一環として，天理市立前栽小学校の，屋内運動場新増改築工事を実施するにあたり，この小学校の所在する地域は，約200.000m²におよぶ，周知の遺跡地内にあって，天理市前栽町，杉本町，富堂町の一帯に，須恵器片，瓦器片，土釜片などの遺物が散布している所です。これより西南約200mには，平等坊・岩室遺跡，また，北東約250mには，九ノ坪・シマダ遺跡があって，弥生時代から室町時代に至る遺物が出土しています。

この工事の施行に先立ち，約1.200m²（本調査442m²）について発掘調査を実施いたしました。

従来は，古墳時代から室町時代に至る遺跡と考えられていたのが，この調査によって，縄文時代晩期の遺跡であることが判明いたしました。

本市域で縄文時代の遺跡は，数か所知られていますが，今回の調査によって，この小学校の所在地が，奈良県下でも数少ない，縄文時代晩期の遺跡に加えられることのできましたことは，まことに意義深いことです。

調査にあたって，奈良県教育委員会事務局文化財保存課，奈良県立橿原考古学研究所，ならびに附属博物館，天理大学附属天理参考館，桜井市教育委員会，橿原市教育委員会，大阪府教育委員会，堺市教育委員会，東大阪市教育委員会，大阪市文化財協会，京都市埋蔵文化財研究所，京都大学埋蔵文化財研究センター，滋賀県文化財保護協会，滋賀県守山市文化財センター等（以上順不同）の積極的な，ご助言とご協力を賜わり，深く感謝の意を表します。

昭和59年3月

天理市教育委員会

教育長　中　野　康　治

前栽遺跡調査報告

目　　次

序　　文

第1章　序　　説……1

第2章　調査の契機と経過……2

第1節　調査の契機……2

第2節　調査要項……2

第3節　調査経過—調査日誌—……3

第3章　遺跡の環境……6

第1節　地理的環境……6

第2節　奈良盆地周辺の岩石分布……6

第3節　歴史的環境……8

第4章　調査の記録……15

第1節　試掘調査……15

第2節　遺構の調査……17

1.　河　　川　　跡……17

2.　河川跡の層位……19

第5章　出土遺物の記録……20

第1節　縄文時代早期の土器……20

第2節　縄文時代晩期の土器……20

第3節　石　　器……24

第6章　前栽遺跡の自然科学的研究……25

第1節　前栽遺跡縄文晩期土器の胎土の観察……25

Ⅰ.は　じ　め　に……25

Ⅱ.砂礫種構成……25

Ⅲ.各類型の特徴……26

Ⅳ.砂礫の採取地……29

第2節　前栽遺跡河川跡堆積土の花粉分析……32

第7章　総　　括……38

例　　言

1. 本書は，天理市前栽(せんざい)町329番地における前栽遺跡の調査報告である。ここからは，縄文時代晩期の遺構と，まとまった土器が出土したため，一刻も早く公表することが責務であると考え事実報告を主眼に置いて刊行した。出土遺物，図面，写真などは教育委員会で保管している。これらも活用していただければ幸いである。
2. 現地の調査は，社会教育課　泉　武が担当し，木田繁子が補助をした。
3. 遺物についての番号は，図版，挿図，表などすべて一致している。また，縮小率については（　）で示した。特に土器の図版，挿図は不統一であるが，小破片も重要視し，見易さを優先させた。
4. 土器拓影に「オモテ」・「ウラ」の符号を入れたものがある。これは土器の外面・内面という意味である。
5. 遺物整理，実測図作成等は，木田繁子が中心となり，本文のうち遺物編については　泉　武と木田繁子が共同討議を基にして執筆を分担した。

   第3章第2節，第6章第1節は，八尾市立刑部小学校教諭・奈良県立橿原考古学研究所嘱託研究員　奥田　尚氏に依頼した。第6章第2節は，天理大学附属天理参考館　金原正明氏に依頼した。
6. 縄文土器に関しては，各地の調査機関，調査員の方方より快く実見させていただいた。記して感謝を致します。

   奈良県立橿原考古学研究所　石野博信，泉森　皎，中井一夫，松田真一，岡崎普明，天理大学附属天理参考館　置田雅昭，金原正明他館員諸氏，桜井市教育委員会　萩原儀征，橿原市教育委員会　斎藤明彦，長谷川俊幸，堺市教育委員会　北野俊明，大阪府教育委員会　渡辺昌宏，大野薫，大阪市文化財協会　松尾信裕，京都大学埋蔵文化財研究センター　泉　拓良，滋賀県文化財保護協会　宮崎幹也，京都市埋蔵文化財研究所　平方幸雄，東大阪市教育委員会　福永徹雄，守山市文化財センター。
7. 本書の編集は，泉　武が担当した。

図 版 目 次

図版 1. 前 栽 遺 跡　航空写真（カラー）
図版 2. 前 栽 遺 跡　土器調整……22
図版 3. 前 栽 遺 跡　土器突帯……22
図版 4. 前 栽 遺 跡　土器(1)……20～24
図版 5. 前 栽 遺 跡　土器(2)……20～24
図版 6. 前 栽 遺 跡　土器(3)……20～24
図版 7. 前 栽 遺 跡　土器(4)……20～24
図版 8. 前 栽 遺 跡　土器(5)……20～24
図版 9. 前 栽 遺 跡　土器(6)・石器……20～24
図版10. 前 栽 遺 跡　航空写真……1
図版11. 前 栽 遺 跡　遺構……15
(1) 垂 直 遺 構 全 景……17
(2) 東方から見た遺構全景……17
図版12. 前 栽 遺 跡　遺構……17
(1) 東方から見た河川跡……17
(2) 西方から見た河川跡……17
図版13. 前 栽 遺 跡　遺構……19
(1) 西 壁 断 面 土 層……19
(2) 河 川 内 堆 積 状 況……19
(3) 河川跡西壁土層（図10）……19

（本文対照頁）

挿　図　目　次

図 1. 天 理 市 位 置 図……1
図 2. 奈良盆地周辺の岩石分布図……7
図 3. 前栽遺跡と周辺遺跡分布図……9
図 4. 和爾・森本遺跡出土の土器……11
図 5. 平等坊・岩室遺跡（4 D―G21区ピット）出土土器……11
図 6. 調査地点と遺構検出略図……15
図 7. 第1・2トレンチ断面土層図……16
図 8. 遺 構 検 出 状 況……18
図 9. 河川跡内中・下層堆積状況（東壁）……19
図10. 河 川 跡 西 壁 土 層……図版13
図11. 深　鉢　A　類　(37)……20
図12. 深　鉢　B　類　(1)……21
図13. 深　鉢　C　類　(3)……21
図14. 石　器　実　測　図……24
図15. 前栽遺跡　土器実測図・拓影　(1)……図版 4
図16. 前栽遺跡　土器実測図・拓影　(2)……図版 5
図17. 前栽遺跡　土器実測図・拓影　(3)……図版 6
図18. 前栽遺跡　土器実測図・拓影　(4)……図版 7
図19. 前栽遺跡　土器実測図・拓影　(5)……図版 8
図20. 前栽遺跡　土器実測図・拓影　(6)……図版 9
図21. 河川跡西壁花粉分析用土壌採取地点……32

写　真　目　次

写真 1. 調 査 ス ナ ッ プ……3
写真 2. 遺 構 検 出 状 況……4
写真 3. ヒ ジ リ 古 墳……13
写真 4. 試 掘 ト レ ン チ……16
写真 5. 北 岸 の 検 出 状 況……17
写真 6. 花　　粉(1)……36
写真 7. 花　　粉(2)……37

表　目　次

表 1. 前栽遺跡の周辺遺跡地名表……10
表 2. 前栽遺跡土器破片数……24
表 3. 前栽遺跡縄文時代土器の胎土観察表……30・31
表 4. 前栽遺跡河川跡土壌花粉ダイヤグラム……33

調　査　報　告

第1章　序　　説

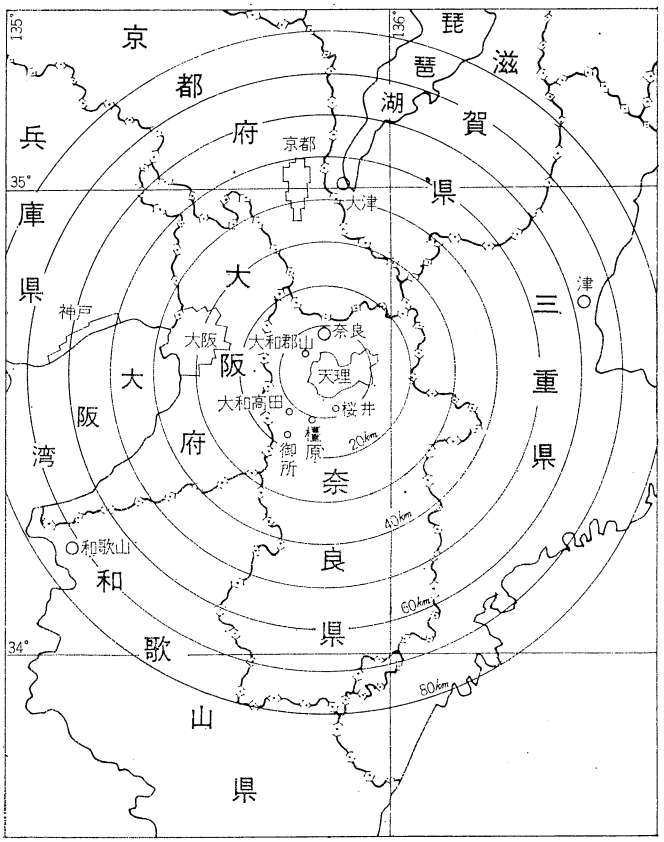


図1　天理市位置図

天理市は，奈良盆地のほぼ中央部で東山麓に沿って南北に長い市域とそれと同規模の面積を有する山間部によって形成している。遺跡は，平野部にあっては卓越した古墳群が，グループをつくって点在している。

弥生時代にあっても，平等坊・岩室遺跡のように，この地域の拠点的集落が営まれていたことが，考古学的調査により説明されている。

昭和58年5，6月前栽小学校旧屋内運動場北側広場の遺跡調査において，縄文時代晩期の自然河川跡を確認した。岸辺から縄文時代早期の土器片1点，晩期の土器片約500点が出土した。このうち，縄文時代晩期の資料はその後の調査の結果，弥生時代の直前の様相を示すことが明らかになった。換言すれば，前栽遺跡は，狩猟時代から，稲作に代表される農耕社会へと移ってゆくいわば過渡期にあたっている。このような資料のもつ重要性を考えると一刻も早く報告書を作成することが調査者の義務であろう。万全を尽したとは言いがたいが，資料を開示することによって責任を果たしたい。なお，すべての原資料と図面・スライド・写真類は当教育委員会で保管しているので御活用いただきたい。

第2章　調査の契機と経過

第1節　調査の契機

前栽遺跡の調査は，天理市教育委員会事務局総務課より，天理市前栽町329番地の前栽小学校屋内運動場新増改築工事に伴って遺跡の調査願いが出された。そして当該地は，前栽遺跡として周知の遺跡であるところから，同市教育委員会社会教育課で発掘調査を担当することになった。

今回の調査は，前栽小学校旧屋内運動場北側広場の約1,200m²の面積である。このため，東・南の境界沿いに，試掘のためのトレンチを設定して遺構の存在を確認し，その後，必要な部分について調査面積を拡大する方法をとった。

現地調査は，1983年（昭和58年）5月28日に開始し，6月3日には試掘を終え，引続き調査地を拡張して，同年6月30日に調査を終了した。

出土した遺物の整理は，同年7月から翌年3月にかけて行った。

第2節　調査要項

遺跡名	前栽遺跡（奈良県遺跡地図8D-320）
所在地	天理市前栽町329番地　前栽小学校内
面積	約200,000m²
時代	縄文時代早期・晩期
遺構の種類	河川跡　1.　土坑　1
調査理由	前栽小学校屋内運動場新増改築工事に伴う調査
調査面積	約1,200m²（本調査442m²）
調査期間	1983年（昭和58年）5月28日～6月30日
調査主体	天理市教育委員会
調査担当者	天理市教育委員会　社会教育課　泉　武

第３節　調　査　経　過　―調査日誌―

1983年（昭和58年）

５月28日（土）晴

調査地の東側と，南側に幅４ｍの試掘トレンチを設定した。また，校門東側，隣接地上にＢ.Ｍを設定する作業を行った。テント設営。

５月29日（日）　休日

５月30日（月）晴

第１トレンチ（南北トレンチ）の南から重機により，整地土を取り除く作業を開始した。３層で茶褐色粘質土の，しっかりした土になっている。このため，この面で遺構を検出すべく，広げはじめた。４層・５層は砂層である。

写真１　調査スナップ

橿原考古学研究所　泉森　皎調査課長指導。

５月31日（火）晴

南側で第２トレンチ（東西方向のトレンチ）を調査した。遺構は検出できなかった。また，第１トレンチの北について約４ｍ調査した。

６月１日（水）晴

第１トレンチの断面図を作成した。また，北端では，河川跡を精査した。この結果，幅約３ｍ，深さ50～80㎝であった。河川跡底付近より炭化物が出土した。

６月２日（木）晴

北端に第３トレンチを設定した。河川跡は西南方向へ流れているようである。北岸を検出した。南岸付近で土器片が少量出土した。

教育長現場視察。

６月３日（金）晴

第１トレンチの精査と，第３トレンチは掘り終えた。この結果，東西約30ｍ，南北約14ｍの範囲で拡張することになった。

教育次長ほか２名視察。

６月４日（土）晴

北より本調査を開始した。河川跡内２層目に土器を含んでいるようである。また，サヌカイトの

小剝片も出土した。

6月5日（日）晴　休日

6月6日（月）晴

西への拡張を引続いて行った。そして，河川跡内の一部については，上層堆積土を掘りはじめた。青灰色粘質土であるが，遺物は含んでいない。

6月7日（火）晴

西側への拡張を終えた。西端で南北方向に深掘りを行った結果，黒灰色土の下に，さらに砂の堆積があり，これが1層目の堆積土であることを確認した。深さは約3ｍである。

6月8日（水）晴

西端の南岸で土器が集中して出土した。すべて破片であるが，約18～20㎝の堆積土中の包含遺物である。中央部の堆積土からは，ほとんど出土しなかった。教育次長視察，橿原考古学研究所　中井一夫氏調査指導。

6月9日（木）晴

下層について一部調査を行った。深さは中層より約1.5ｍあり，川底は堅く凹凸が激しい。植物質，自然木を含むものの，土器等の遺物は出土しなかった。

6月10日（金）晴

西約10ｍについて掘り終えた。上層から遺物は出土しなかった。

6月11日（土）晴

引続き，東へ中層である黒灰色粘質土の調査を続行した。西より約15ｍ付近であるが，出土する土器は少ない。

6月12日（日）晴　休日

6月13日（月）雨

雨のため現場作業を中止した。

6月14日（火）晴

河川跡の掘り方は東へ進んだ。下層の砂堆積層を掘ったが，遺物は出土しなかった。

6月15日（水）くもり

中層の堆積土については，ほぼ掘り終えた。河川跡中央部では，土器は包含していなかった。また，岸辺でも土器

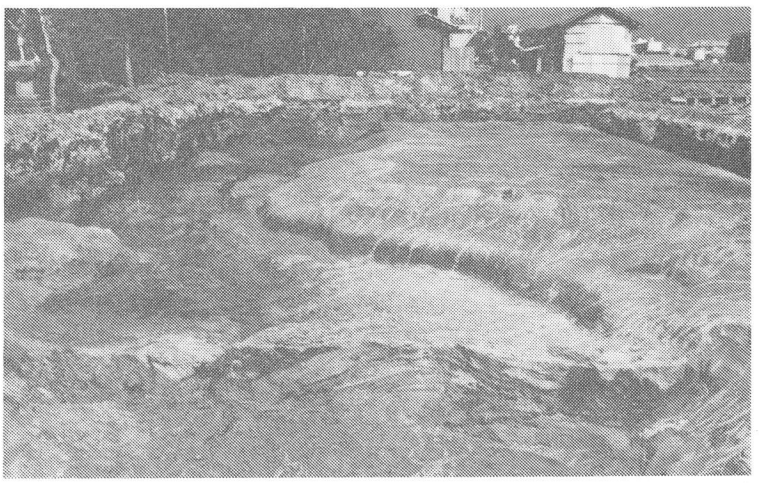


写真2　遺構検出状況

の出土量は少なかった。さらに，東端で北岸の一部分を検出した。少し蛇行している。

6月16日（木）雨

雨のため現場作業を中止した。

6月17日（金）くもり

中央付近の河川堆積土を取り除いて，全体をほぼ出し終えた。橿原考古学研究所　西藤清秀氏調査指導。

6月18日（土）晴

西端の南岸付近について精査を行い，中層の岸を検出した。また，この付近の堆積土層面の写真撮影と実測を行った。押型文土器を採集した。

6月19日（日）晴　休日

6月20日（月）雨

雨のため現場作業を中止した。

6月21日（火）雨

雨のため現場作業を中止した。

6月22日（水）晴

2日続いた雨もあがり，現場作業を再開した。午前中は壁の崩れを取り除く作業を行った。その後，河川跡内の精査を行った。

6月23日（木）晴

西端の下層の岸辺を精査した。北岸は，かなりえぐり込んでいる。

6月24日（金）晴

遺構全体の掃除を行った。

6月25日（土）晴

全体の撮影と航空写真撮影を行った。

6月26日（日）晴　休日

6月27日（月）雨のちくもり

雨のため現場作業を中止した。

6月28日（火）晴

遺構の実測と断面図の作成を行った。また，南岸に径80cm，深さ40cmの土坑を検出した。遺物はなく，時期は不明である。

6月29日（水）晴

西端の土層を実測した。また，発掘器材の搬出を行った。

6月30日（木）晴

すべての作業を終え現場を引き上げた。

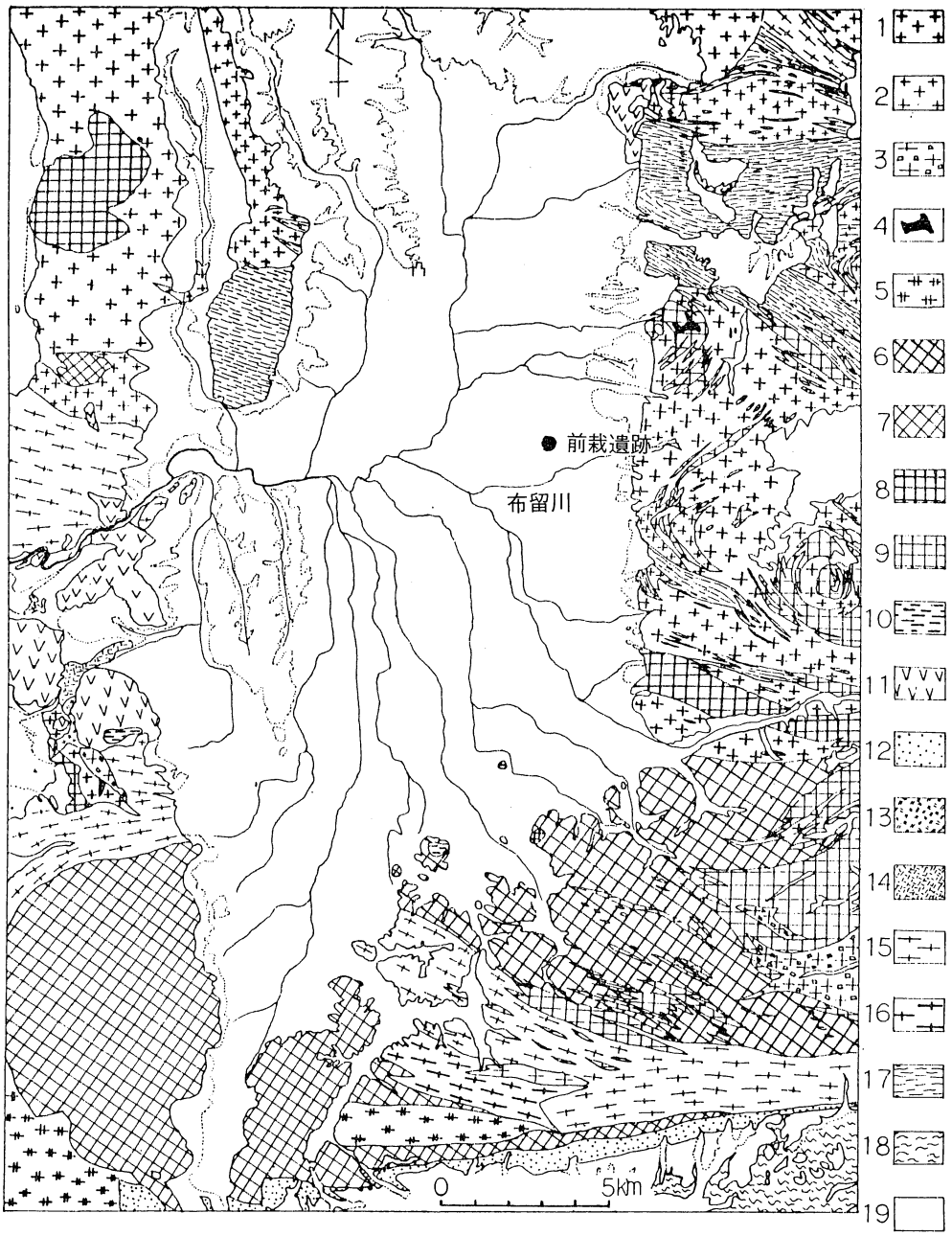
第3章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

前栽遺跡は，天理市街地より西へ1.5㎞の地点で，標高は約55.7ｍである。遺跡の周辺には，前栽・杉本・平等坊・岩室・富堂の各集落が点在している。そのほぼ中間の水田地帯が，遺跡の立地するところである。東には，布留の渓谷が遠望できる。天理市域を45ｍから65ｍのコンタラインで地形をみると，富堂・岩室・稲葉にかけて東西の中心方向に扇状地形特有のふくらみが確認できる。これは，中ツ道沿いで南北幅約2㎞程度がみられ旧布留川の堆積状況を，よく地形にあらわしている。このため，現在の布留川は，西へ直進することなく，谷口から南西方向に蛇行して，九条町付近で西へ方向を変え，吉田町で初瀬川と合流する。この流れは，扇状地の縁辺部に沿っての流路とみられる。従って，前栽遺跡の周辺では集落の発達はみられるが，扇状地の中央には主たる河川の流れはみられない。

第2節　奈良盆地周辺の岩石分布（図2）

奈良盆地に流入する河川流域を含めた範囲の岩石種分布は，図2に示すとおりである。奈良盆地に分布する第三紀層の砂礫・粘土層，第四紀層を除けば，花崗岩類は盆地の周辺部に分布する。岩石種は深成岩として，粗粒の角閃石黒雲母花崗岩・細粒から中粒の両雲母花崗岩・ペグマタイト・角閃石黒雲母石英閃緑岩，片麻岩類として，片麻状角閃石黒雲母花崗閃緑岩・片麻状黒雲母花崗岩・変輝緑岩・変斑粉岩である。火山岩類として，流紋岩，安山岩である。凝灰岩類として溶結凝灰岩か凝灰岩である。角閃石黒雲母花崗岩は奈良市東南部から桜井市東北部にかけての山地部と生駒市から生駒郡平群町の山地部に広く分布する。両雲母花崗岩は奈良市大慈仙町付近，平群町高安山付近，天理市滝本町付近に分布する。ペグマタイトは奈良市高樋町から同市興隆寺町にかけて分布する。角閃石黒雲母石英閃緑岩は奈良県大阪府境の金剛山・葛城山から御所市巨勢山にかけて分布する葛城石英閃緑岩と，吉野郡吉野町竜門岳から橿原市の南部にかけて広く分布する竜門岳石英閃緑岩である。片麻状角閃石黒雲母花崗閃緑岩は奈良県大阪府境の二上山南方竹内峠付近，奈良県大阪府境の信貴山南方，奈良市須川町付近に分布する。片麻状黒雲母花崗岩は黒色と灰色の縞模様を



1 粗粒角閃石黒雲母花崗岩、2 細粒～中粒両雲母花崗岩、3 中粒斑状花崗岩、4 ペグマタイト、5 花崗閃緑岩、6 石英閃緑岩（竜門岳石英閃緑岩）、7 石英閃緑岩（鳳凰石英閃緑岩）、8 変斑糜岩、9 変輝緑岩、10流紋岩、11安山岩 12砂岩・礫岩、13流紋岩質溶結凝灰岩、14凝灰岩、15片麻状花崗閃緑岩、16片麻状石英閃緑岩、17縞状片麻岩、18結晶片岩、19礫・砂・粘土層（第三紀・第四紀）

図2　奈良盆地周辺の岩石分布図（黒点は前栽遺跡）

なす岩石で，奈良市東部の高円山から同市菩提山町正暦寺にかけてと，大和郡山市矢田丘陵南半分に分布する。変輝緑岩は片麻岩の各所にレンズ状で産する場合と，竜門岳石英閃緑岩に密接な関係で，広く分布する場合とがある。変斑粉岩は生駒山，三輪山付近に部分的に分布する。流紋岩は二上山雌岳・畝傍山・耳成山に分布する。安山岩は黒雲母安山岩と輝石安山岩に区分される。黒雲母安山岩は二上山西方寺山，信貴山，小さな岩脈として生駒山地に分布する。輝石安山岩は二上山雌岳，香芝町春日山，大阪府柏原市明神山，奈良市若草山に分布する。溶結凝灰岩は石英が多く含まれる灰色の岩石とほとんど軽石からなる白色・黒色の岩石とに区分される。前者は奈良市春日山付近にわずかに，宇陀郡に広く分布する。後者は二上山南西，大阪府太子町鹿谷寺跡付近に部分的に分布する。凝灰岩は二上山西方屯鶴峯付近，香芝町春日山に部分的に分布する。奈良市の東山麓部の第四紀層中にはチャート，安山岩の礫が多く見られる。

第3節　歴史的環境（図3・表1）

前栽遺跡は，前節で述べたように布留川によって，もたらされた堆積地上に立地している。また，この範囲はおおむね標高45mから60mの東から西への緩傾斜の地形である。地質分類では第四紀の沖積層によって形成されている。この扇状地上の遺跡分布を南北2.5㎞，東西2㎞の範囲で拾ってみると，遺物散布地が22か所（このうち調査によって遺構を検出したもの8か所）古墳4か所となっている。古墳の存在が極端に少ない地域として特徴的である。

遺跡分布地は，その一つ一つが，かなり広面積を占めており，互いに接近し，22か所がさらに2～3群に大きく，まとまるのではないかと思われる。採集された土器によると，弥生時代から鎌倉・室町時代まで複合している場合が多くみられる。このことは，既に発掘調査が実施された遺跡で明らかになりつつある。奈良時代の条里制遺構も顕著に残存しており，前栽遺跡の西側は中ツ道が通じている。以下時代を追って調査された遺跡について概要を記したい。

縄文時代

この分布地図の範囲内での縄文時代の遺跡は，前栽遺跡以外には知られていない。天理市内での遺跡としては，布留，和爾，堀田池，鈴原，上入田，山田，黒塚東，沢などである。

布留遺跡（文献1）

この遺跡は，1939年の調査で縄文時代の遺跡として確認されてから，数次にわたる調査が実施されてきた。そして1983年の埋蔵文化財天理教調査団による調査によって，ほぼ全容が明らかになった。縄文時代についていえば，立石遺構・土坑・炉跡と河川跡が確認され，包含層から，中期末～後期にかけての多量の土器と，石錘・磨石・叩石・石鏃が出土した。この地一帯が，縄文時代の定住社会を形成していたことをうかがわせる遺跡である。

和爾・森本遺跡（図4）（文献2）

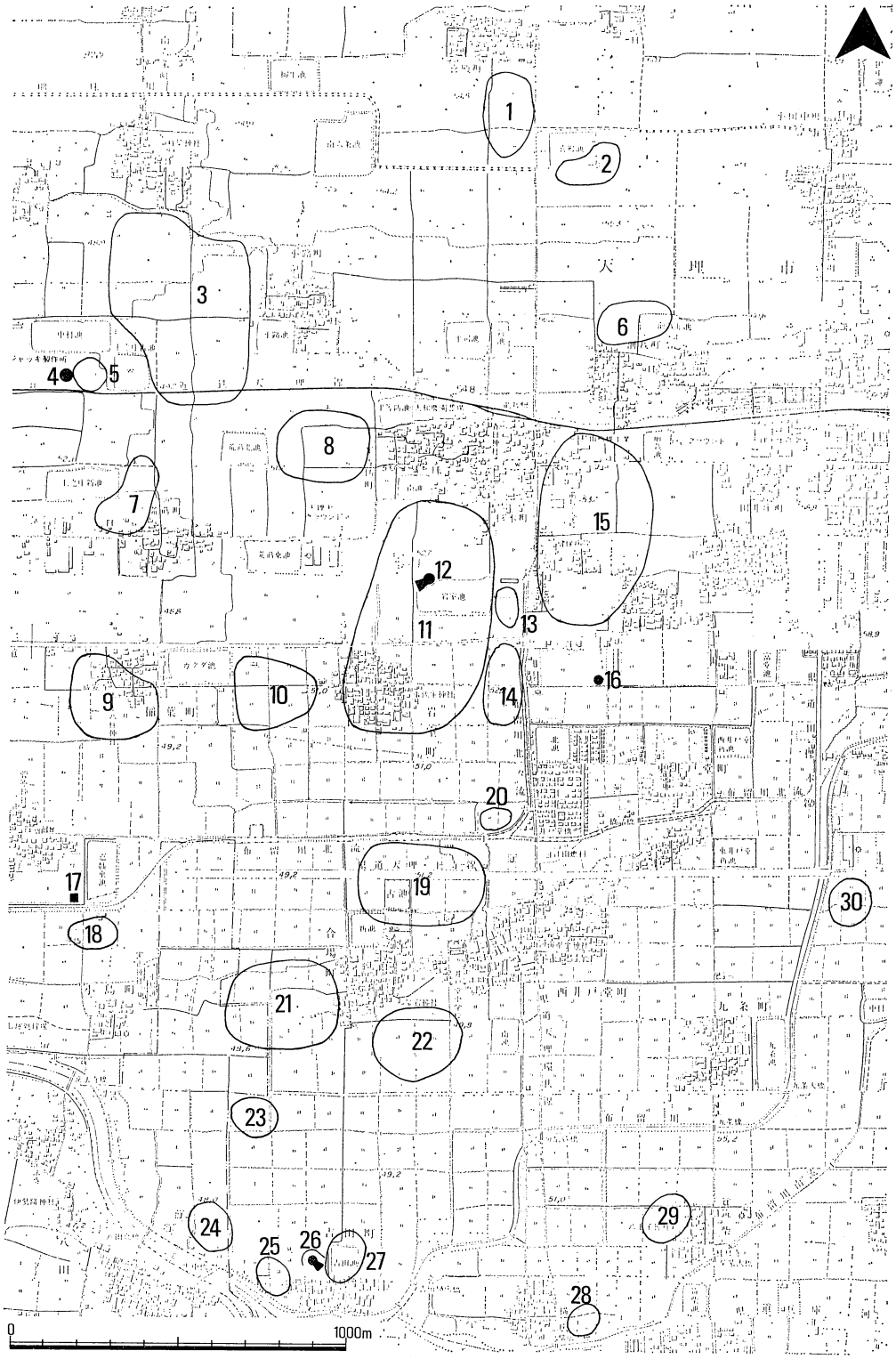


図3　前栽遺跡と周辺遺跡分布図　　15 前栽遺跡（小学校が今次の調査地点）

表1　前栽遺跡の周辺遺跡地名表　　（番号は地図番号に一致する）

番号	遺跡名	遺跡地図番号	種類	時代	遺跡概要	所在地	備考
1		8 D-133	遺物散布地	古墳～奈良	土師 須恵	天理市喜殿町字堂前字池町	
2		8 D-134	〃	弥生～奈良	須恵 サヌカイト	天理市喜殿町字六ノ坪	
3	小路遺跡	8 C-27	溝 居館跡	古墳～室町	土師 須恵	天理市小路町	1983年12月試掘調査
4	星塚古墳	8 C-26	古墳	古墳後	円墳径約40m 横穴式石室 玉類 埴輪 鉄 馬具 玉類装飾品	天理市二階堂上ノ庄町字星塚	文献5
5	星塚遺跡		溝 集落跡	古墳中	溝 土師	〃	1983年12月試掘調査
6	九ノ坪・シマダ遺跡	8 D-317	玉作遺跡	〃	土坑 河川跡 土師 須恵 勾玉 管玉	天理市前栽町字九ノ坪字シマダ	文献6
7		8 C-44	遺物散布地	弥生～古墳	弥生 土師 須恵	天理市荒蒔町	
8		8 C-48	集落跡	〃	溝土坑 弥生 土師 須恵	天理市平等坊町	
9		11A-49	遺物散布地	古墳後～鎌倉	土師 須恵 瓦器 土釜	天理市稲葉町	
10		11A-50	〃	古墳後～奈良	須恵	天理市岩室町	
11	平等坊・岩室遺跡	8 D-318	集落跡	弥生～古墳	溝土坑 弥生 土師 須恵	天理市岩室町平等坊町	文献3
12	岩室池古墳	新出	古墳	古墳中	前方後円墳 全長約50m	天理市岩室町	文献4
13		8 D-319	遺物散布地	古墳～平安	須恵 瓦器	天理市岩室町平等坊町	
14		11B-2	〃	平安～鎌倉	土師 須恵 瓦器	天理市岩室町	
15	前栽遺跡	8 D-320	河川跡	縄文	河川跡 土坑 縄文	天理市前栽町	**当報告**
16		11B-4	古墳		円墳 径約20m	天理市東井戸堂町字タルタ	
17		11A-51	〃		方墳	天理市嘉幡町字林東	
18		11A-53	遺物散布地	古墳後～平安	土師 須恵 黒色土器	天理市嘉幡町	
19	合場遺跡	11A-59	集落跡	古墳前	土坑 土師 須恵	天理市合場町	文献7
20		11B-3	遺物散布地	平安	土師	天理市西井戸堂町	
21	合場第二遺跡	11A-60	集落跡	弥生前～古墳前～鎌倉	溝 弥生 土師 堀 須恵 青磁	天理市合場町 磯城郡田原本町大字八田	1984年2月発掘調査
22		11B-5	遺物散布地	古墳後～奈良	土師 須恵	天理市西井戸堂町	
23		新出	〃	奈良～鎌倉	土師 須恵 瓦 瓦器	天理市吉田町字庄カイト	
24		11A-61	〃	古墳～鎌倉	土師 土釜 埴輪	磯城郡田原本町大字八田	
25		11A-56	〃	奈良～平安	弥生 土師 須恵	天理市吉田町字サメタ	
26	ヒジリ古墳	11A-54	古墳	古墳	前方後円墳 全長約45m 埴輪	天理市吉田町字ヒジリ	
27		11A-55	遺物散布地	弥生後～古墳後	弥生 土師 須恵	〃	
28		11B-119	〃	奈良～平安	土師 須恵	天理市九条町（横広）	
29		11B-118	〃	奈良	土師	天理市九条町（筑紫）	
30		11B-6	〃	古墳後～奈良	須恵	天理市田町	

この遺跡は，1975年から3次にわたって調査された。この結果，弥生時代から平安時代にかけての土坑・井戸・溝・古墳などが確認された。このうち縄文土器が出土したのは，幅約10m，深さ1.5mの河川跡である。主として弥生時代中期から古墳時代中期にかけての土器が出土したが，この中に8点の縄文時代晩期の土器が含まれていた。これらはいずれも磨滅が少ないところから，晩期の住居地が付近にあったのではないかと想定されている。深鉢土器4点のうち，2点は突帯文土器で，外の2点は，無文土器である。

堀田池遺跡
（文献2）

この遺跡は，上記の報告書に付載として報告されている。和爾・森本遺跡の北約900mの地点で蔵之庄町の北側にあたっている。偶然の機会に発見されたため，遺構の様子がよくわからないが，土器は後期初頭から中期と考えられている。

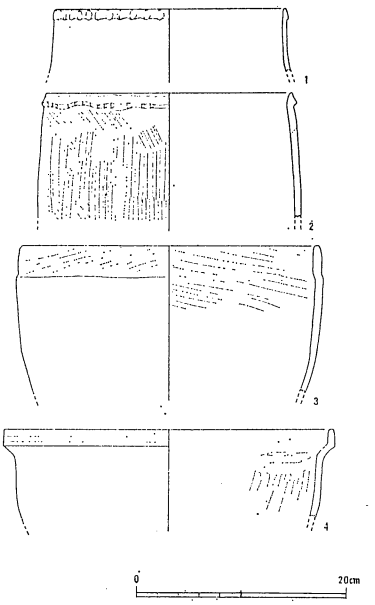


図4　和爾・森本遺跡出土の土器

以上の3地点の縄文時代の遺跡は，いずれも標高65mから80mラインにかけて分布している。そして遺構や土器の出土数などみると，布留遺跡の卓越した規模の大きさが，改めて認識される。

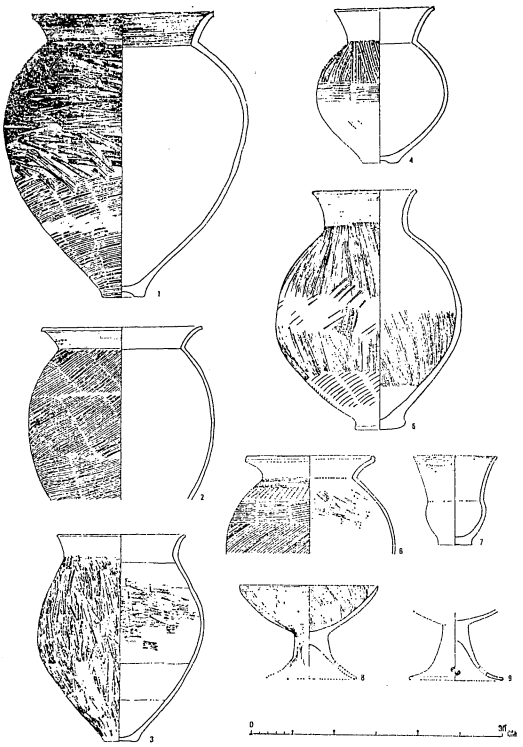


図5　平等坊・岩室遺跡
（4D—G21区ピット）出土土器

弥生時代

平等坊・岩室遺跡（図3・5，表1-11・12）
（文献3・4）

この遺跡は，大正7年に故佐藤小吉氏によって調査されて以来，6次にわたる調査が実施された。当遺跡は，天理市では弥生時代から古墳時代にかけての最も規模の大きい住居集落と考えられる。

調査の主たるものは

1918年（大正7年）の調査。弥生時代の遺物包含層を確認，多数の弥生後期土器が，若干の前，中期の弥生土器・石器類とともに出土した。

1970年の調査。弥生前・中期の溝は幅3m，深さ1mの規模があり，平等坊・岩室の集落をとりまく環濠の一部と考えられている。

出土した遺物は，前期中段階から後期までの各時期の土器があり，このほかには，磨製石剣・蛤刃石斧・石包丁・石鏃・石槍などの石製品であった。

1978～79年（昭和53年～54年）の調査。この2次にわたる調査は，岩室池の西北隅にある墓地の改修時に実施された。ここでは，前方後円墳1基（新出）と弥生時代前期から古墳時代中期までの土坑・溝が確認された。そして，この結果，当遺跡が弥生時代にとどまらず，古墳時代中期（布留期）まで存続していたことが知られた。

1980年（昭和55年）の調査。この調査は，岩室池西側の水田地帯の水路改修工事によって実施された。この調査では，溝・土坑などが検出され，この地点は主として弥生中期から後期にかけての居住地と推定されている。

この後，1983年には，岩室町の集落の南約100ｍの地点での水路改修に立ち会った。この結果では，砂層が連続していて，遺構や遺物包含層は見られなかった。このため当遺跡の南へのひろがりは，このあたりまでは及んでいないと考えられた。

以上のように，平等坊・岩室遺跡は，弥生時代前期から古墳時代中期にかけて連綿と継続した集落跡であることが次第に明らかになってきた。遺跡の規模も，東西400ｍ，南北600ｍにまたがる広大な面積を占めていて，弥生時代の，この地域の母集落の一つと考えられる。

古墳時代

星塚古墳（図3，表1-4）
（文献5）

1951年（昭和26年）に発掘調査が実施され，その内部構造が明らかになった。古墳は標高49ｍの平坦地に築かれ，1983年（昭和58年）の調査により2重の周濠をもつことが判明した。墳丘は長径約40ｍ・短径約35ｍの東西に細長い楕円形を呈している。高さは約2ｍであった。内部主体は，南へ開口する横穴式石室が築かれていた。内部には家形石棺が安置されていた。出土遺物はおびただしい数にのぼっており，特に装飾品類に見るべきものがあった。また，埴輪が出土しており，6世紀前半と考えられる。

九ノ坪・シマダ遺跡（図3，表1-6）
（文献6）

前栽町の北側にひろがる遺跡で，1982年に一部調査が実施された。そしてこの結果，古墳時代中期の河川跡と，土坑などが確認され，出土遺物の内容などから，玉作遺跡と判断された。調査面積が少なかったため，工房や住居跡などは確認されなかったが，布留川扇状地において2か所の玉作遺跡が確認されたことの歴史的な意義は大きい。

合場遺跡（図3，表1-19）
（文献7）

この遺跡は，1980年（昭和55年）に合場町の北側200ｍの地点で実施された。この結果，古墳時代中期の溝と土坑が確認された。溝は3条あり各各南北の流路である。このうちＳＤ401は，幅5ｍ・深さ80㎝の規模の大きな流路と，土坑66か所が確認された。これらの遺構から出土した土器は，いずれも庄内から布留式土器である。この遺跡は平等坊・岩室遺跡より，以南においてさらに密度の高い遺跡が存在し，しかも，東西450ｍ，南北300ｍの広がりをもつ大規模な遺跡として確認された。

合場第二遺跡（図３，表1-21）

1980年の合場遺跡の調査の後，1984年には，同町の集落の西において，調査を実施した。そして，弥生前期から古墳時代中期の遺物包含層を確認した。この遺跡は庄内から布留式土器にかけての土師器が中心である。合場遺跡と同一時期の様相を示している。

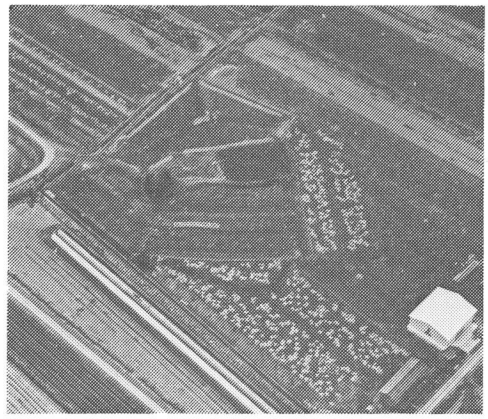


写真３　ヒジリ古墳

ヒジリ古墳（図３，表1-26，写真３）

この古墳は，吉田町の北側の水田に築造された前方後円墳である。布留川と初瀬川が，ちょうど合流する地点にあたっている。現在は墳丘裾部が，ひどく削られて姿を変えている。北西・東南方向に主軸をもち，墳丘全長約40ｍ，濠を含めた全長は約70～80ｍの規模が想定できよう。墳丘部は削平されて後円部では約１ｍの高さしか認められない。墳丘周辺では円筒埴輪片が採集できた。これによると６世紀代と考えられる。標高約48ｍで，しかも，二つの河川の合流地点に築造されているという立地条件を考えると，注目される古墳である。

以上が縄文時代から古墳時代にいたる周辺の遺跡環境である。この中で弥生時代から古墳時代にかけての遺跡については，かなり明確になってきた。特に平等坊・岩室遺跡の数次の調査によって，弥生時代前期から古墳時代中期にかけて大規模な集落が，世代を継続して存在していたとみられる。前栽遺跡と一体の群構成として，とらえる必要があるかもしれない。また，布留遺跡の調査のうち縄文時代については後期まで存在しており，その後，集団の一部が２㎞の下流の前栽遺跡へ移動したとも想定できよう。さらに，前栽遺跡より南へ約１㎞にあたる合場遺跡は，２次にわたる調査の結果，弥生時代前期から古墳時代前期にかけて，集落を形成していたと思われる。このようにみると，前栽遺跡は，布留川扇状地域に存在する縄文時代の遺跡と弥生時代の遺跡をつなぐ重要な位置を占めていると理解できよう。

（参考文献）

文献１

末永雅雄　小林行雄　中村春寿「大和における土師器住居址の新例」（「考古学」第９巻　第10号　1937）

『布留遺跡範囲確認調査報告書』天理市教育委員会　1979

「布留遺跡堂垣内地区現地説明会資料」（「発掘瓦版号外２」埋蔵文化財天理教調査団1983.10）外多数あり。布留遺跡関係文献の一覧は，『布留遺跡範囲確認調査報告書』参照。

文献２

「和爾・森本遺跡」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第45冊』　1983）

文献３

佐藤小吉「山辺郡二階堂村大字平等坊石器遺跡」（『奈良県史蹟勝地調査会報告書　第６回』1919）

帝塚山大学郷土研究会「岩室」（『帝塚山大学郷土研究会報告第１冊』1966）

白石太一郎　前園実知雄『天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概要』奈良県教育委員会　1970

松田真一　「天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1978) 奈良県立橿原考古学研究所編

松本洋明　「天理市平等坊・岩室遺跡第5次調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1980) 奈良県立橿原考古学研究所編

文献4

楠元哲夫　「岩室池古墳発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1980年度) 奈良県立橿原考古学研究所編

文献5

小島俊次　「星塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第7輯』1955)　奈良県教育委員会

文献6

泉　　武　『九ノ坪・シマダ遺跡発掘調査概報』天理市教育委員会　1983

文献7

藤井利章　「合場遺跡試掘調査報告書」(『奈良県遺跡調査概報』1980)　奈良県立橿原考古学研究所編

第4章　調査の記録

第1節　試掘調査（図6・7，写真4）

調査地は，前栽小学校の旧屋内運動場北側広場で，総面積は約1,200m²である。この地はかつて木造校舎が建っていたところで，地下遺構が相当破壊を受けていることが予想された。このため，調査にあたっては，トレンチを設定して遺構の有無を確認することから始めた。試掘トレンチは，体育館にそって東西方向に1本と東端に南北方向に1本設定した。

各トレンチでは，表土から約50cmが盛土部分にあたっていて旧耕土，床土などは確認できなかっ

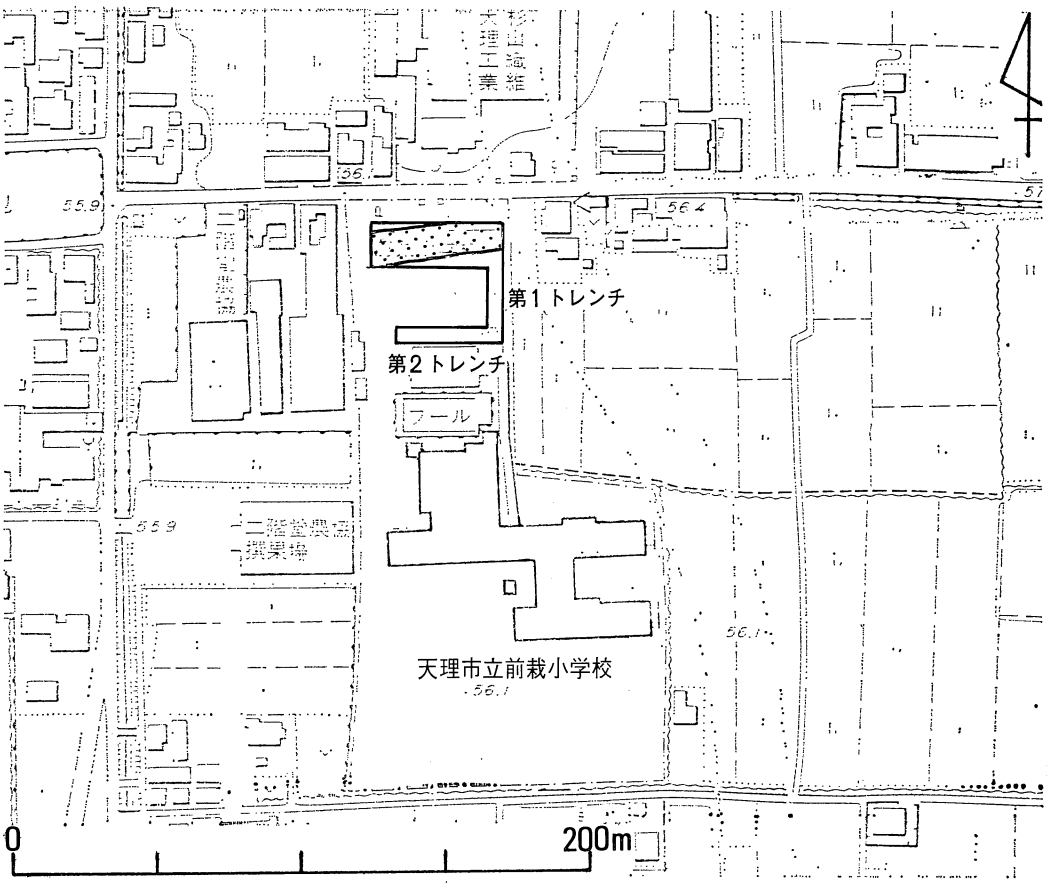


図6　調査地点と遺構検出略図（SD1　点内）

た。校舎の建築に際して，かなり削平を受けていることをうかがわせた。下層については，茶褐色土と黒灰色粘質土が，約30cm堆積した。最下層は砂質の堆積層であり，２本のトレンチ全体にわたって広がっていた。表土より約60cmで黒色粘質土，ないし茶褐色粘質土である。この結果から，中・近世の遺構は，すべて削平されていると判断できた。

南北トレンチの北端においては，黒灰色粘質土を基盤とする溝状遺構が認めら

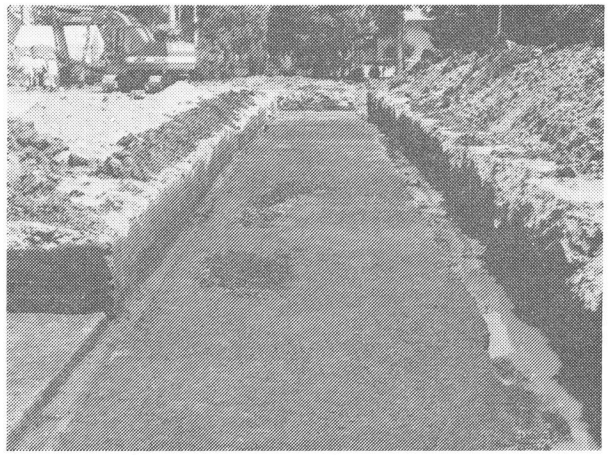


写真４　試掘トレンチ

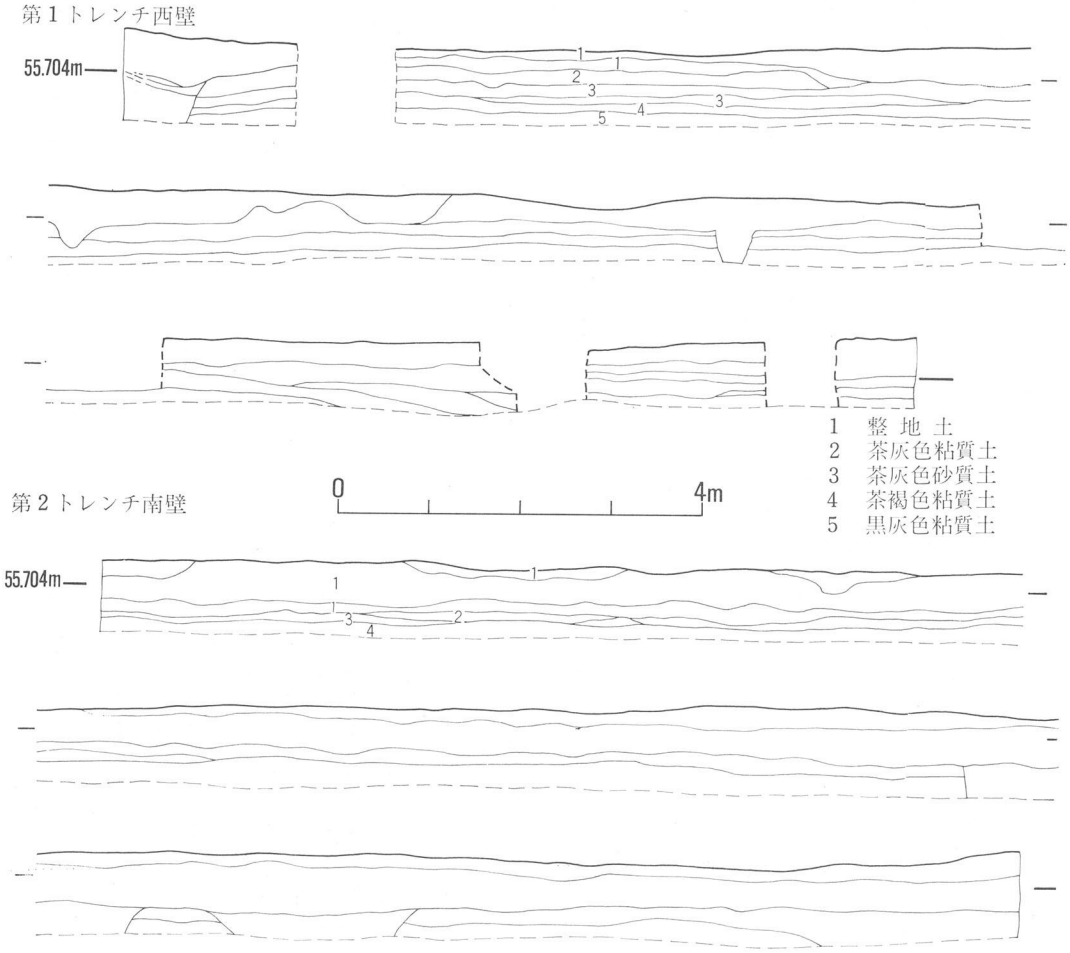


図７　第１・２トレンチ断面土層図

れた。断面観察では皿状の浅い，くぼみになっていて，幅は約５ｍ，深さ約１ｍであった。流路の方向は，やや南西をさしていた。

以上の試掘の結果，調査区内の北側には，東西方向に流路をもつ河川跡のあることが判明した。時代については，判断できる土器は小破片で量的にもかなり少なかったが，縄文時代晩期から弥生時代前期であろうと想定した。

このため，調査は，東西34ｍ，南北13ｍ，面積約442ｍ^{2}について実施した。

第2節　遺構の調査

調査した遺構は，河川跡１と土坑１である。土坑は，東寄りの南端にあり直径約1.2ｍの円形を呈し，深さ約42㎝であった。すり鉢状の底部で遺物は出土しなかった。どの層位から切り込んでいるのか明らかにしがたかった。

1.　河川跡（図８，図版11・12）

河川跡は，調査区のほぼ全体にわたって確認し，南岸については，全容が明らかになった。北岸については，東半分が調査区外となった。調査の時点では，樹木や石碑が立っていた関係もあり拡張することが困難であった。

流路の方向は，東西より5°南へ振れている。しかし，全体の流れとしては，蛇行したものか，別の流路が存在するのかは，確認できなかった。７Ｃ区では北岸が部分的に現れて，また，北壁に，入っていく状態をみると，5.6Ｃ区についても別の流路の合流とみるよりは，蛇行していると解釈した方がよい。岸の幅は，２区では約11ｍ～12ｍが最大であり，４区の最も狭い部分では，約６ｍである。７区では約７ｍの規模をもっている。

川底については全体にわたっては調査できず，１，２，３区についてのみ，様子をうかがった。この結果，最深部は川岸上面より2.7ｍの深さを測った。ただ，川岸部の限られた部分で，すり鉢状に深くなっていることを確認した。これは，東の狭くなっている部分の流れによって，滝つぼ状に深くえぐられた結果ではないかと考えている。西端付近では約２ｍの深さであった。

出土した土器は，大半が１Ａ・Ｂ・Ｃ区，２Ａ・Ｃ区の両岸付近に集中していた。しかも，流路中央部の堆積土中にはなく，岸近くの堆積土中に限られていた。土器にまじってサヌカイトの極小片もかなり見られた。すべて削屑で製品は出土しなかった。ほかの地区についても，土器片が散在的に岸縁辺部の堆積土より出土し

写真５　北岸の検出状況（東端付近）

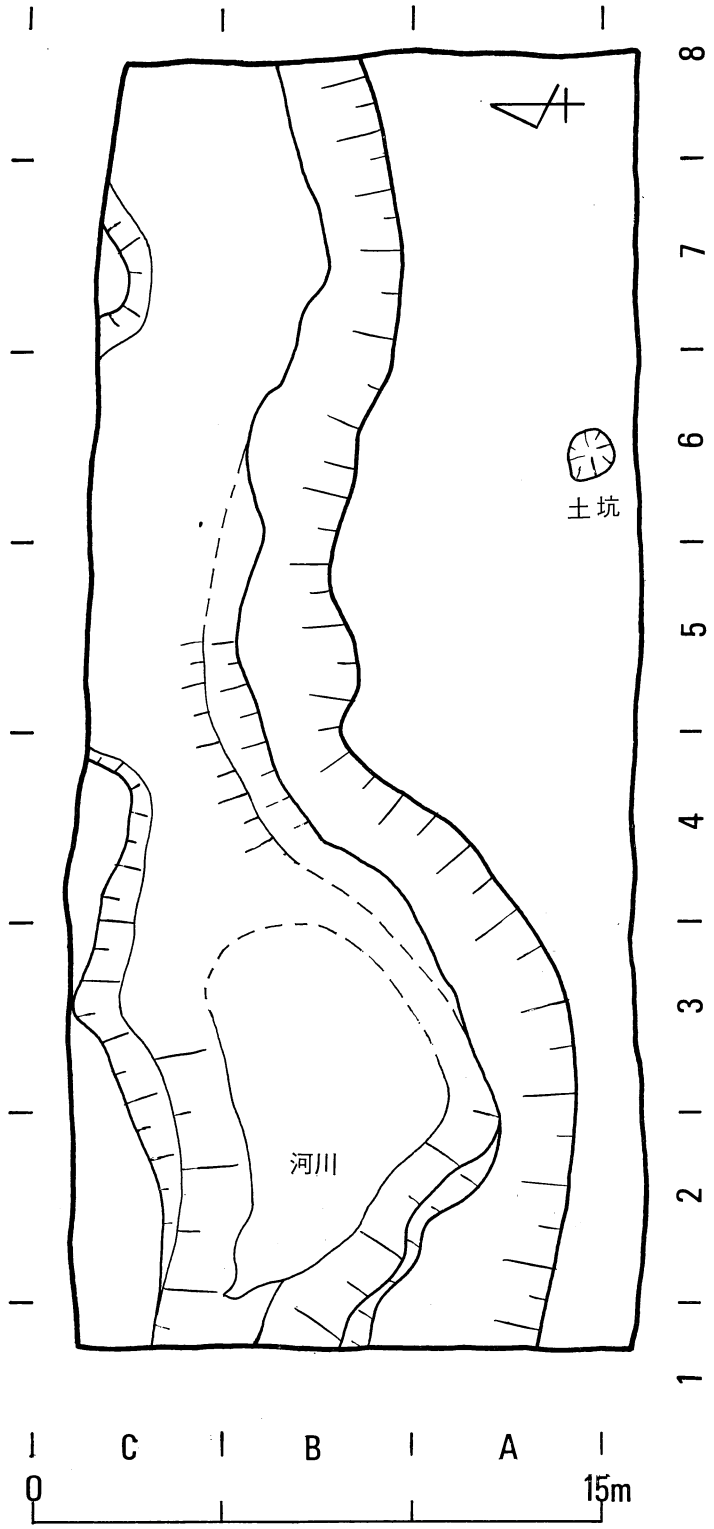


図8　遺構検出状況

た。各各の土器については堆積土が単純であったことから，各層位毎については個別に上げなかった。このため，この点についての分析はしていない。

2.　河川跡の層位(図9・10, 図版13)

河川跡の堆積状態については，西端を検討し，土器の出土層位も明らかにしえた。河川堆積は大別して下層の砂層，中層の粘土層，上層の微砂層に分類された。各層では2～3層に細別されるが基本的には変らなかった。上層の微砂は，青灰色を呈していて流路の最終堆積を示している。遺物は全く出土しなかった。中層は3層に細別できた。このうち土器が出土したのは両岸付近の茶褐色砂質土層であり，中央部の黒灰色粘質土層では遺物は出土しなかった。ただ自然木などが多量に含まれていた。下層の砂堆積層は細別できたが流れが複雑であった。2・3B区について精査したが，土器などの遺物は出土しなかった。川幅は，下層で約8m，中層で約8mと変化はないが中層は，北へ少しずれているようである。上層は約7.5m，深さ20cmの規模であった。この時期では河川としての機能を，ほとんど失っていたものと考えられる。河川を覆うのは，茶褐色粘質土であるが，この層がいつの時期の堆積であるか，決め手を欠いている。

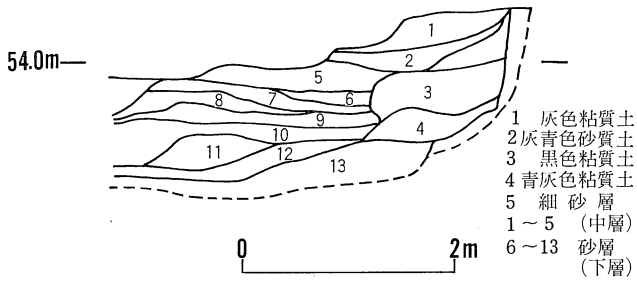


図9　河川跡内中・下層堆積状況（東壁）

花粉分析のための土壌採集は，両端の断面観察用のあぜで行った。対象番号を記しておく。1—3，2—4，3—5，4—7，5—8，6—9，7—10，8—23，9—20，10—22である。いずれも河川中央部に限定した採集となり，岸縁辺部についても採集する必要があったと反省している。花粉分析の結果については，第6章第2節に報告している。

以上が検出した遺構内容である。調査区が小面積であったため，生活遺構については究明できなかった。しかし，出土した土器は，川岸付近に集中し，しかも上流から流れたような磨滅は，ほとんど見受けられないことから，前栽遺跡内で集落跡を求めることができるかもしれない。

また，出土した土器は，後述するように1点の資料を除いて，縄文時代晩期の様相を示すものであることが明らかになった。その点を考慮すると，この河川跡は，中層の堆積が形成された時期が縄文時代晩期と考えられる。ただ下層については，時期を示す遺物がないため判断できないが，下層はほとんど砂堆積を示しているところから，ある時期に急激な流れによって，扇状地が掘削されて河川がつくられたようであり，中層とはそれほど時間的な隔絶はないと考えている。

第５章　出土遺物の記録

第１節　縄文時代早期の土器（図20，図版９）

３㎝×４㎝程度の胴部の破片である。外面はネガティブな楕円の押型文土器の範ちゅうにはいるであろう。楕円文は長さ７㎜，幅２㎜の長方形に近い形状である。器壁は６㎜の厚みである。角閃石と結晶片岩が多く含まれている。これは在地の粘土を使用したのではなく，和歌山県紀ノ川流域の地帯よりの将来品と考えられる。時期は縄文時代早期前半で大川式土器に，はいるであろう。（文献１）

第２節　縄文時代晩期の土器（図15・16・17・18・19・20，図版４・５・６・７・８・９）

今回出土した土器のうち大部分をしめている。口縁部に１条，もしくは口縁部と体部に１条の刻目突帯文を有する一群の土器であり，大半は河川岸縁辺の傾斜地から出土している。出土量は表２のとおり517片を数えた。すべて破片であり，復原できたものは少ない。実測可能なものは極力図示したが，小片のため口径などは参考程度にとどめておきたい。

器種は，深鉢・浅鉢・壺の３種である。そして器種の判明した総数は75個体である。ただ，壺の破片については，総数で12個体であるが，胎土や焼成状態などの諸条件を勘案すると５点程度と見られる。このことから深鉢が85％以上と高率を占めることになる。遺物は多量ではないが，観察の結果，形態等により以下のごとく分類を試みた。

１　土器の形態的分類

深鉢形土器

１条の刻目突帯文を持つもの，２条のもの，無刻目のもの，の３種類がある。しかし口縁部のみの破片で，刻目突帯文が１条であるのか２条であるのかが確定できないものも多い。そのためここでは土器の形態による分類を行う。

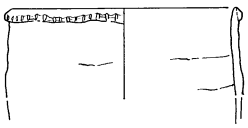


図11　深鉢Ａ類（37）

深鉢Ａ類　口縁部がほぼ垂直にのびる。肩部で屈曲しないと思われる単純な器形。口縁端部に１条の刻目突帯文を有する №

図12　深鉢B類(1)

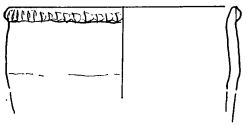


図13　深鉢C類(3)

7, № 37 が典型的なものである。№ 2 の口縁部はやや外びらきであるが，A類に分類してさしつかえないと思われる。B類，C類に比して量が多く（30個体中17個で56%），肩部破片では № 18, № 25 などが含まれる。

深鉢B類　口縁部が外反ぎみに外上方へのびる。肩部でわずかに屈曲すると考えられる（30個体中6個）。№ 1, № 8, № 46 などがあり，2条の刻目突帯文をもつものでは № 20 などがある。

深鉢C類　体部に最大径をもち，口縁部がわずかに内彎気味に上方へのびる。胴ふくらみの器形である（30個体中7個）。

№ 3, № 5, № 11 などがあり，2条の刻目突帯文を持つものでは № 21 が，また小片であるが № 35 もこのC類であると思われる。

浅鉢形土器

出土したものはわずか2点であり，特に № 48 は小片である。いずれも深鉢に比べ，調整は丁寧で，口縁部付近に軽い磨研を施している。深鉢と同様の胎土を持つ粗製土器である。

№ 48 は外方へ向かって広がる形態をとるが，№ 16 は体部が内彎するボール型を呈しており，口縁端部より約1㎝下がったところに穿孔がみられる。これは焼成前にあけられたものである。

壺形土器

これも3点のみの出土を見るだけである。形態により2種類に区分できる。

壺 A 類　№ 47, № 49 の2点である。外反する頸部をもち，口縁部は外へ開く № 47 は大形に属している。どちらも輪積みの痕跡が明瞭である。口縁端部付近が欠けているので突帯文の有無は不明である。

壺 B 類　内傾する口縁部を持ち，端部に刻目突帯文を持つ，№ 26 がB類である。

底　部

平底，凹底，丸底の3種類がある。いずれもが，どの器種の底部にあたるのかは不明である。

平　底　明確な平底を形成するもの。

Ⅰ　類　底部の成形方法は不明。№ 43, № 52 があり，№ 52 は底面が厚く，外面に磨研がみられる。

Ⅱ　類　わずかに底面中央にくぼみを有している。成形方法は不明。№ 45 は底部と体部の境が明瞭でない。№ 4 は底部側面が外方へやや突出し，丸みのある体部を有する。

凹　底　1点のみ出土した。№ 44 は底部中央に粘土を充塡して底部を成形し，軽いケズリ調整を施している。

丸　底　№ 6 のみであり，第1トレンチより出土した。層位は河川岸と同じである。底面近

くより下から上へのケズリが施されている。形態的には滋賀里Ⅳまで遡ることができるが，長原遺跡(文献2)，大福遺跡(文献3)，などにみられ，古い遺物の混入ではないかという見方がされている。しかし出土地点の違いや，出土状態も単一であるところから，やや疑問も残る。(文献4)

2　成形手法

粘土帯を積み上げて成形（輪積手法）しており，巻き上げによるものは認められなかった。接合面を残すものも何点か見られたが，断面で確実に観察できたものは非常に少ない。このうち№9では接合面が内傾しているのが認められた。堺市鈴の宮遺跡出土(文献4)の土器と同様の接合方法である。

3　調整手法

器面内外の調整手法は，ケズリとナデである。ケズリは，板状工具による手法と，ヘラ状工具によるものが見られる。前者では，小口端面の痕跡が良く残っている。ナデ調整は，従来より二枚貝によるナデ調整の一手法と認められるため，二枚貝ナデと呼ぶ。このほかにも植物の枝茎によるナデも見られる。ミガキ調整は浅鉢と底部のうちの1点の外面に認められた。浅鉢は横方向，底部は縦方向に施されている。ヘラ状工具によるものであろう。ケズリ調整は縦方向が主流であるが№22の内面にのみ横方向のものが見られる。原体には板状工具，ヘラ状工具が考えられる。ナデ調整は深鉢に，もっとも多く使用されている。方向は不明のものが多いが，強くなでることによってハケ調整のような痕跡が認められるものもある。これは№7，№15の内面，№35外面に顕著である。指頭，板状工具，ヘラ状工具などが考えられる。二枚貝調整は№7，№47の外面などに見られる。海のない当地方ではシジミなどが考えられるが，二枚貝調整は滋賀里Ⅱに出現し，滋賀里Ⅲにかなりみられるが，晩期後半には衰退すると考えられ，これらの土器については検討を必要とする。類例を待ちたい。

また同じ条痕が残るものでも植物の枝茎などを束ねたものを原体とするものもある。これは類例もみられる。当遺跡出土のものでは№49の外面に顕著である。

土器の多くに炭化物，ススの付着が認められる。繰り返し使用されたことを物語っている。特に№5の外面には厚さ0.1㎝程度で全体に炭化物がある。ふきこぼれが付着したものであろう。№52の内面にも炭化物が厚く付着し，他の深鉢や浅鉢にも外面だけでなく，内面にまでススが及んでいるものもある。ススと炭化物の違いから，煮炊きされた物の違いが考えられるが，底部には付着が認められなかった。

4　刻目突帯文

すべて貼り付けによるもので，貼り付けには下記の方法が考えられる。

a.　上下から押さえて貼り付ける。断面は三角形，もしくは台形状を呈する。肩部の突帯に多用される方法である。

b.　上から押さえて貼り付ける。

b′.　b のヴァリエーションと考えられる。口縁部内面と突帯の上側を挟んで貼り付けるものであ

る。b. b′とも断面は三角形もしくは，かまぼこ形を呈し，扁平形状のものもある。

c. 突帯を口縁端部に被さるように貼り付けるものである。板付遺跡(文献5)におけるC形式に類するものである。№2が典型的なC型であるが，同じC型においても当遺跡独特の方法をとるものもある。№24で行われているもので，薄い粘土帯を，とがりぎみに作った口縁端部の前後に被せる方法である。外面は突帯となり，内面も少しふくれ，接合部が残る。他に№21の口縁部の突帯も，この方法によっていると思われる。類例を見ないため，現在のところ地方色として考えている。

5　口縁部の突帯の位置

A　口縁部よりやや下ってつくもの

B　口縁端部に沿っているもの

B′　口縁端部に被さるもの

があり，B′は貼り付け方法のc型と重なっている。位置に関してはAは古い要素であり，この位置に突帯のある土器が，古い段階に位置づけられるかどうかをみた場合，形態や刻み目など全体から推定すると，一概には言えなくなってくる。突帯の成形方法は，突帯を貼り付けたのち，すべて横方向になでている。口縁端部より下がって突帯を施す形態では，突帯に続いて端部もなでて仕上げているが，面取りされたものはない。ただ№1で端部を外へ，おりかえしていることや，№21で丸みをもつ端部に刻み目を入れていることなどが注目される。肩部の突帯もaタイプのものでは，突帯とともに突帯の上下の体部にも，横なでが施されている。また1点あるbタイプ(№38)は，突帯上側斜面から続くように，体部に横なでが施されている。いずれも突帯を，しっかり貼り付けるためのものであろう。

刻み目は，おそらくヘラ状の原体を利用していると思われる。口縁部や体部の調整に，二枚貝や板状工具を利用していても，刻み目にはそれらを利用したとは考えられない。突帯に用いる工具と器壁調整用の工具とは，別別のものを用意し使用していたと推定される。№22の刻み目の切坦面には，二枚貝を使用したものとみられる凸線状の条痕が見られる。この土器1点だけであるが，伊勢湾地域からの将来品と考えられる。奈良盆地では，橿原市橿原遺跡，桜井市纒向遺跡(注1)で類品が出土している。刻み目は「湖西線関係遺跡」(文献6)，「長原遺跡」(文献2)を参考として以下のように分類した。

6　刻目突帯文の分類

A. ヘラ状原体の端面で突帯を刻むもの。刻み目はV字状を呈している。

B. ヘラ状原体を斜位に押しつけるように刻むもの。D字，小D字，デルタ状，菱形の刻み目を持つ。

C. ヘラ状原体をねかせて突帯をなでるものや，棒状原体の回転，押圧を利用したもの，および指頭により，なでくぼませるもの，などがある。刻み目はO字，横長のO字を呈する。

このように同じタイプでも，原体を押しつける角度などにより，刻み目の形態に微妙な差が生じ

てくる。またAとBの区別がつきにくいものや，両者が共存する土器もある。Aタイプの中には爪形の刻み目をもつ土器もあり，原体は半截竹管状のものを想像している。

刻み目はBタイプが多く（37個体中20個），残りをAタイプ（8個体）とCタイプ9個体である。総じて刻み目自体は，軽く間隔も間延びしたものが多い。突帯全体のイメージもこの時期―長原式の土器とはかなり異なっている。特徴的なものとして，幅の広いやや扁平気味の突帯があげられるが，これは滋賀県服部遺跡出土のものに類似点をみつけられる。河内や和泉地方より，近江地方に類例を見るのは，きわめて興味深いことであり，後に述べる胎土の観察から，紀ノ川流域の胎土をもつ土器もあり，当時の地域間の交流関係を想像させる。(注2)

表2　前栽遺跡出土の土器破片数

	口　縁	胴　部	底　部	総　数
深　鉢	28	31	1	60
浅　鉢	2	1		3
壺	5	7		12
器種不明細片	1	434	7	442
	36	473	8	517

(注) 1. 体部の破片で長さ 5～6cm 以上で，器種の想定できるものは器種別分類で数えた。
2. 接合できた土器は1点とした。
3. 壺は破片総数で12点あるが，胎土や焼成をみると5点以内であろう。

第3節　石　　器（図版9，図14）

土器包含層（5.6.7層）を精査中にサヌカイト剝片を多く含むため土砂を水洗した。この結果，石器1点とサヌカイト剝片274片を採集した。石器は，幅1.9cm，残存長さ3.5cmあり上下端で少し幅が違っている。厚みは0.7cmを残し，扁平な棒状を呈している。石器の岩石種は，点紋片岩である。

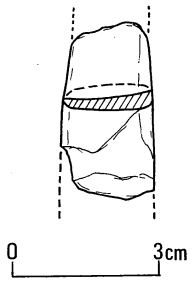
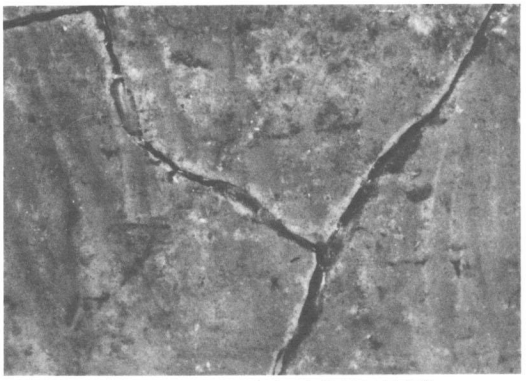


図14　石器実測図

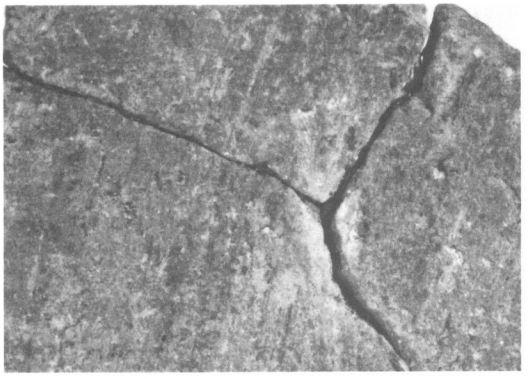
(参考文献)
1　酒詰仲男　岡田茂弘「大川遺跡」(『奈良県文化財調査報告2』1958（奈良県教育委員会)
2　『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会　1982
3　亀田　博「大福遺跡―桜井市大福所在遺跡の報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』)，第36冊　1978
4　北野俊明「鈴の宮遺跡」(『堺市文化財調査報告書11集』) 1983
5　森貞次郎　岡崎　敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編　1961
6　加藤　進　丹羽裕一　外『湖西線関係遺跡報告書』　1973

(注)
1　桜井市教育委員会　萩原儀征氏より実見させていただいた。
2　滋賀県守山市文化財センターの御好意により，未発表のものを実見させていただいた。



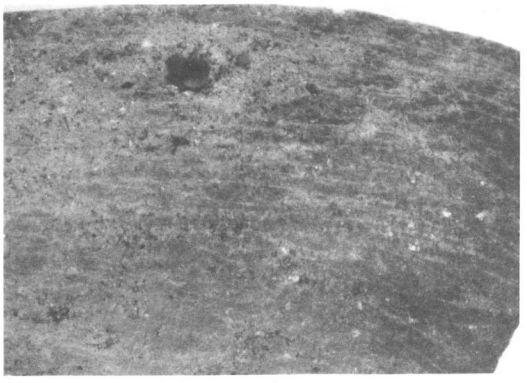
47．二枚貝条痕（壺頸部外面）

49．植物の枝茎によるナデ（壺頸部内面）

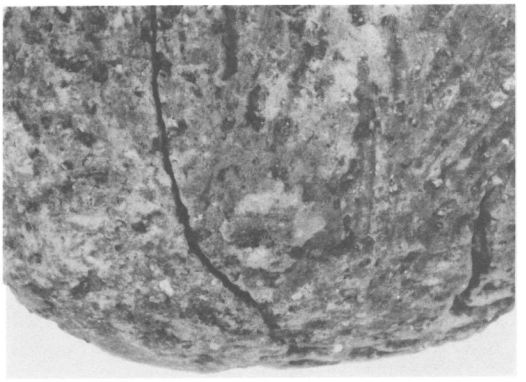


ヘラ状工具によるケズリ（深鉢外面）

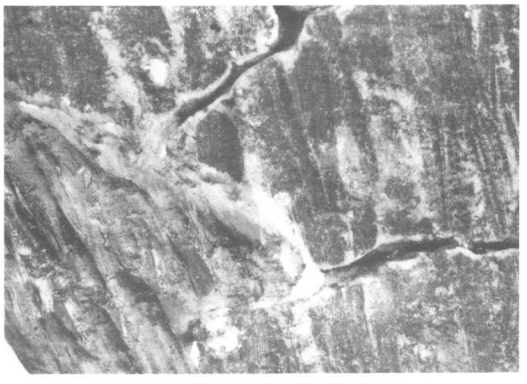
2．板状工具によるケズリ（深鉢内面）



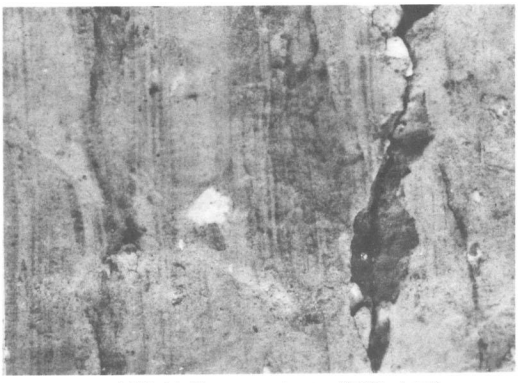
16．磨 研（浅鉢外面）



6．ヘラ状工具によるケズリ（深鉢外面）



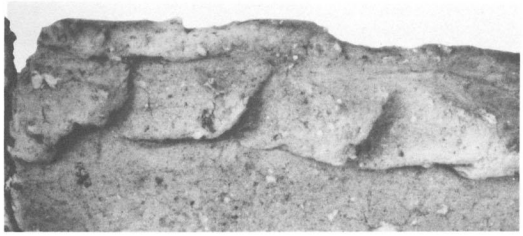
7．二枚貝条痕（深鉢外面）



7．植物枝茎によるナデ（深鉢内面）

（番号は土器番号に一致）

図版3　前栽遺跡　土器突帯（実大）

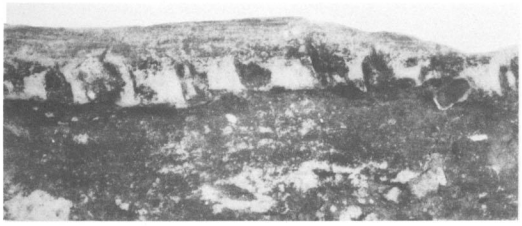


1．　B

2．　B

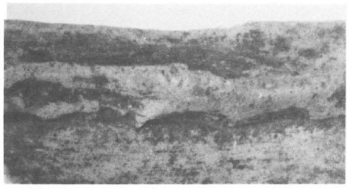
8．　A＋B

5．　B



7．　B

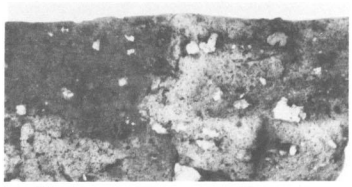
10．　無刻



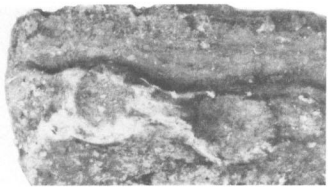
15．　C

9．　C

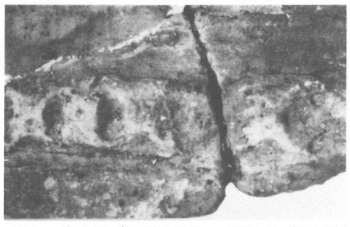
37．　B



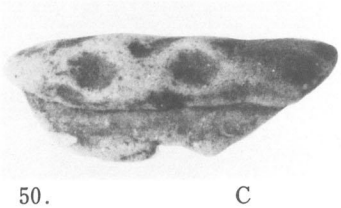
24．　B



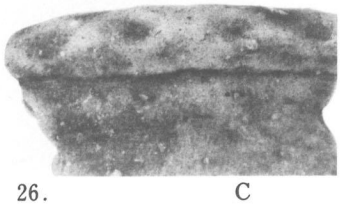
14．　C



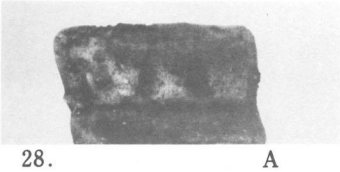
20．上：B（口縁部）、下：A（肩部）



50．　C



26．　C



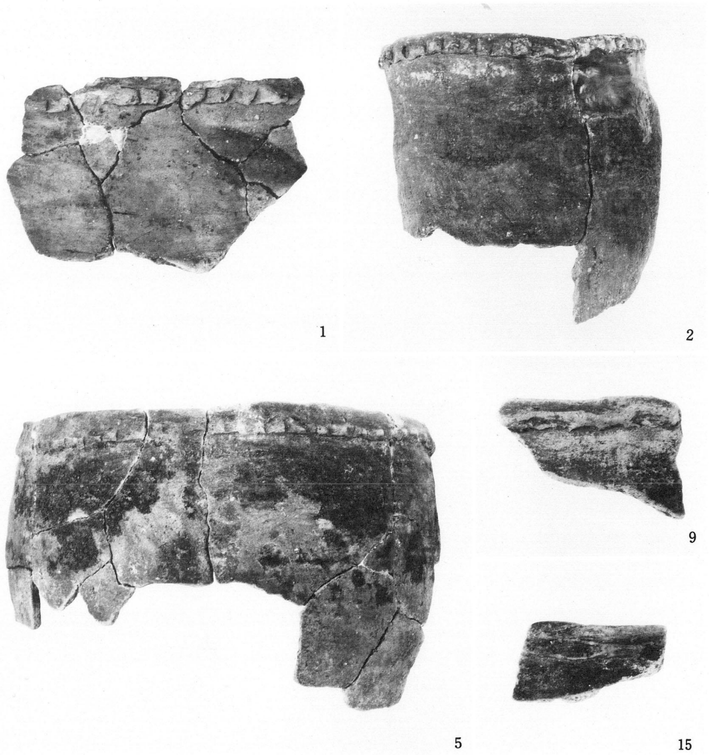
28．　A

27．　A

38．　A

（番号は土器番号に一致）

図版4　前栽遺跡　土器(1)



(1・2・5：$\frac{1}{3}$，9・15：$\frac{1}{1}$)

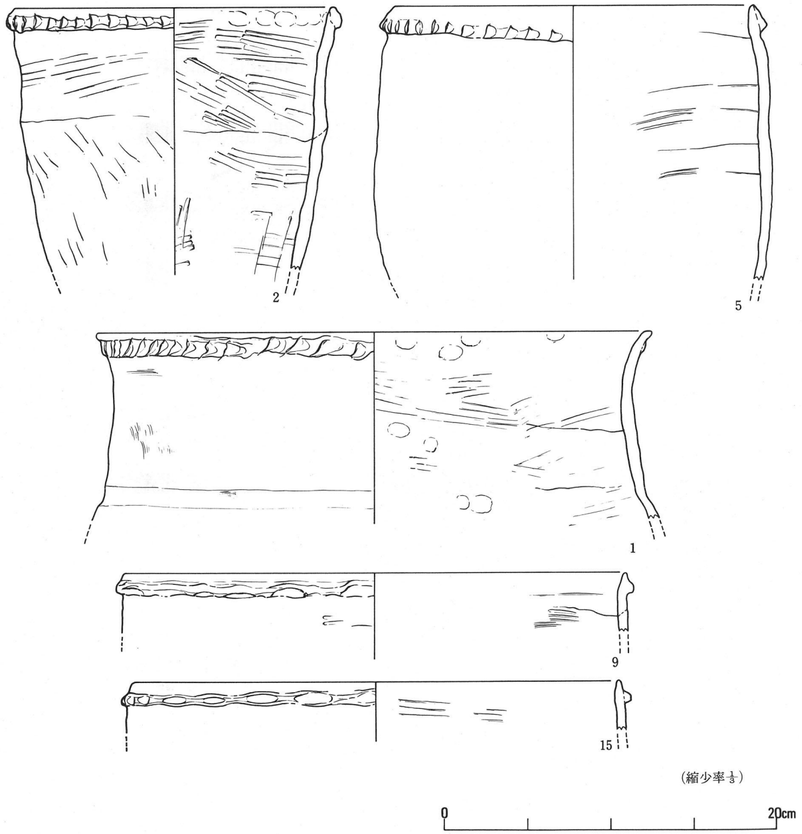
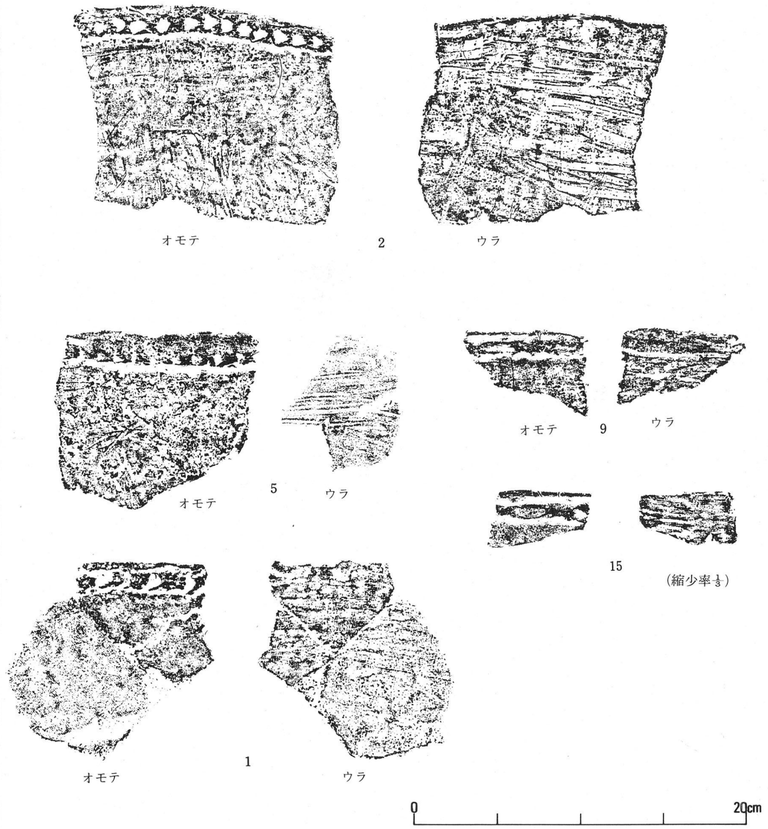


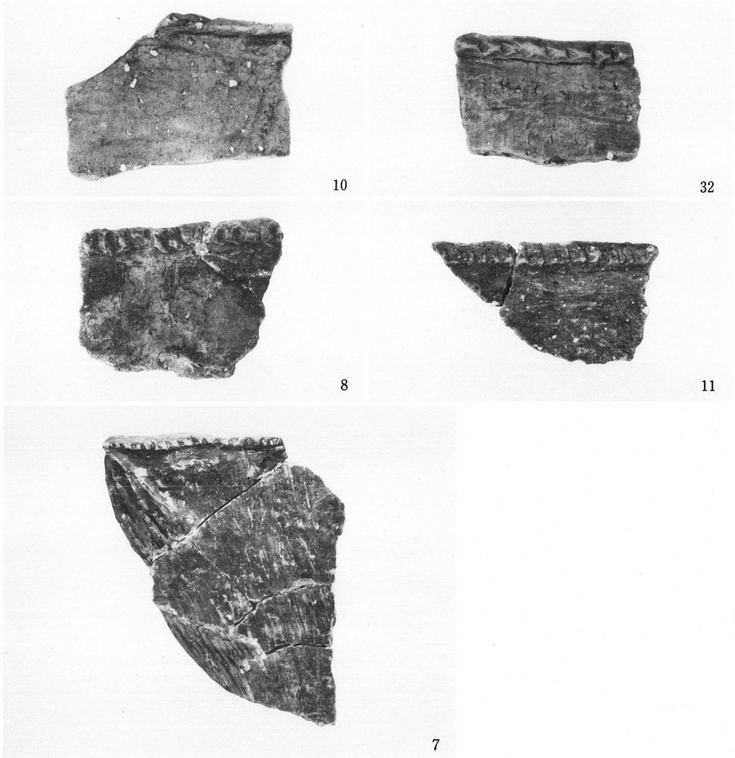
図15　前栽遺跡　土器実測図・拓影(1)



土器番号	器形	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 2	深鉢	19	15.7	口縁端部に被さるように貼り付ける。(c)	B (やや菱形とD字形)	Ⅲ類	外―スス付着のため不明 内―暗褐色	口縁部外面―板状工具によるナデ，体部外面―ケズリ（上→下），内面―板状工具によるケズリ	体部から続いて口縁部も上外方へのびる。	口縁部内面に指おさえのあとあり。
№ 5	〃	23.2	16.6	口縁部内面と突帯の上側を挟んで貼り付ける。(b′)	B (浅いD字)	Ⅱ類	外内面とも，にぶい赤褐色。	外面―ナデ 内面―ナデ，一部に条痕？	体部はややふくらみぎみで口縁部は内傾ぎみに上方へのび端部丸い。	外面に厚さ0.1cm前後のススがほぼ全体に付着。
№ 1	〃	33.4	11	端部より約0.5～0.7cm下に上から押しつけて貼り付ける。(b) 断面―扁平	B (D字)	Ⅱ類	外―赤褐色 内―褐色	外面―ていねいなナデ 内面―強いナデ	口縁部は外傾ぎみに上外方へのび端部は突帯をはりつけた後，部分的に外へおりかえしている。	

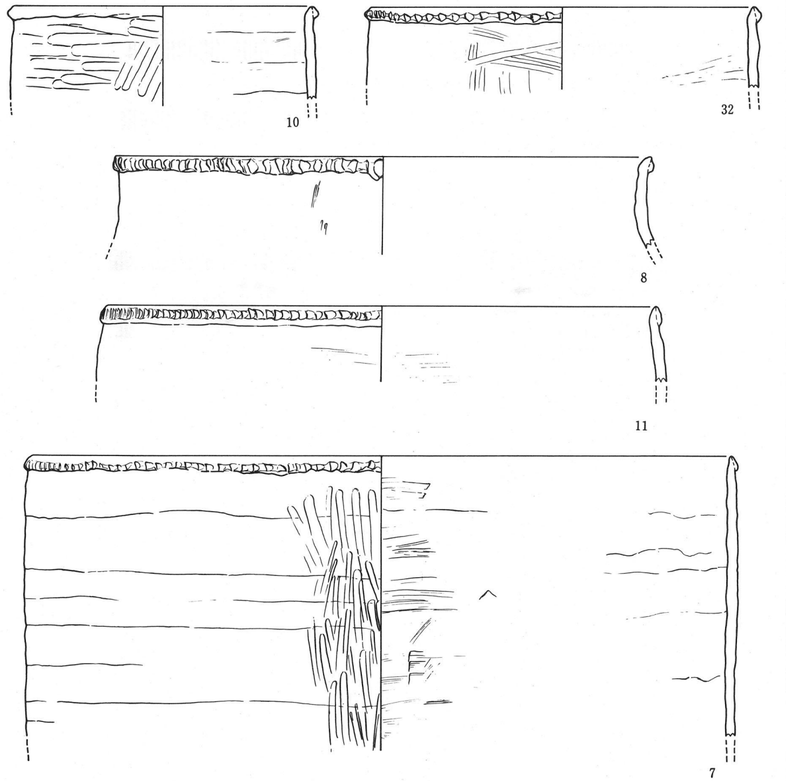
(単位：cm)　(注) 1. 刻み目の項目で（ ）内は「長原遺跡」の報告での分類を示す。 2. 小文字（ ）内は突帯の貼り付けの分類を示す。 3. 胎土の分類は奥田尚氏の分類を示す。（第6章第1節参照）

土器番号	器形	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 15	深鉢	29	3	端部より約0.6～0.7cm下に上下から押えて貼り付ける。(a) 断面―台形	C (横長O字)	Ⅴ類	外―にぶい黄橙色 内―にぶい黄褐色	外面―横ナデ 内面―ナデ，一部に条痕？	口縁部は上方にのび，端部は丸い。	外面―全体にスス付着
№ 9	〃	31	3.6	端部より約0.5cm下に上から押えて貼り付ける。(b)	C (指頭か？)	Ⅴ類	外―にぶい橙色 内―にぶい褐色	外面―ナデ 内面―ナデ，一部に条痕？	――	外面―スス付着

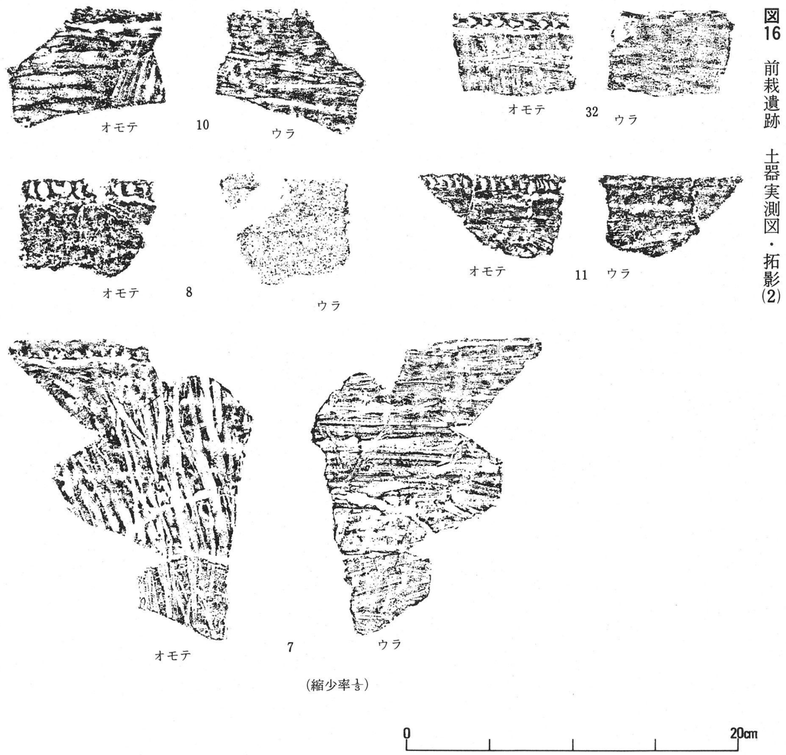


図版5　前栽遺跡　土器(2)

(10・8・32・11:$\frac{1}{2}$, 7:$\frac{1}{3}$)



(縮少率$\frac{1}{3}$)



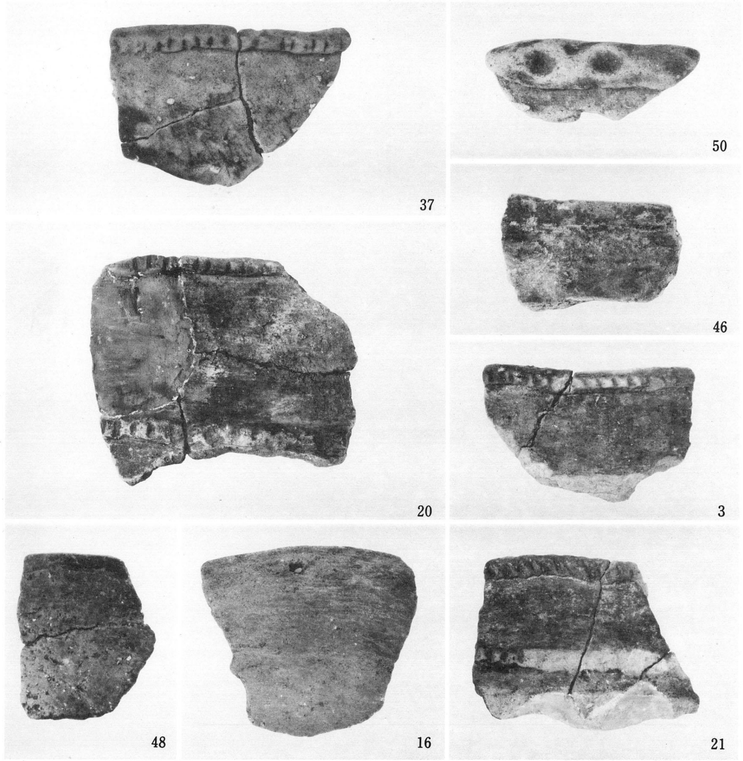
(縮少率$\frac{1}{3}$)

図16　前栽遺跡　土器実測図・拓影(2)

土器番号	器　形	復原口径	残　高	突帯の成形・形態	刻み目	胎　土	色　　調	調　整　方　法	形　　態	備　　考
№ 10	深　鉢	18.7	5.6	端部に突帯の上端を沿わせるように上下から押え貼り付ける。(a) 断面三角形	無	Ⅴ類	外―にぶい黄褐色 内―灰黄褐色	外面―条痕残る。 (幅約0.7㎝原体二枚貝?), 内面―ナデ(二条の接合部)	口縁部はわずかに内傾ぎみに上方へのび, 端部は丸い。	
№ 32	〃	23.8	4.8	端部に上下から押えて貼り付ける。(a)	B (D字)	Ⅳ類	外―にぶい黄褐色 内―にぶい黄橙色	外面―植物の枝茎による条痕 内面―強いナデ	口縁部はほぼ垂直に上方へのび端部は丸い。	
№ 8	〃	32.6	5	端部内面と突帯上側を挟んで貼り付ける。(b′)	A＋B (O字に近いV字)	Ⅲ類	外内面ともにぶい橙色	外面―ナデ 内面―横・縦方向のナデ	口縁部は外傾ぎみにやや上外方へのび端部は丸い。	外面にスス付着

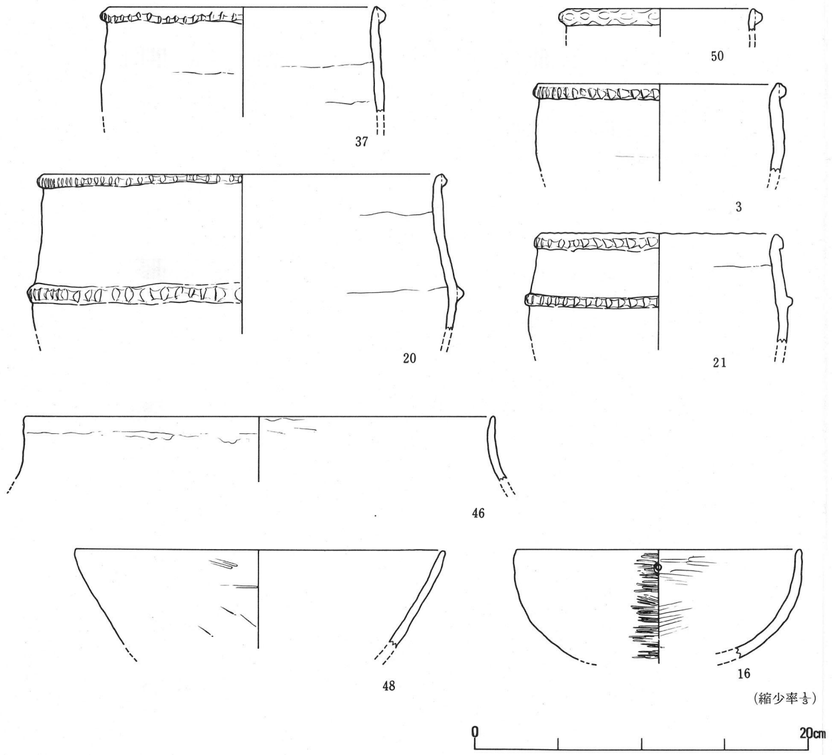
(単位：cm)　(注) 1. 刻み目の項目で(　)内は「長原遺跡」の報告での分類を示す。　2. 小文字(　)内は, 突帯の貼り付けの分類を示す。　3. 胎土の分類は奥田尚氏の分類を示す。(第6章第1節参照)

土器番号	器　形	復原口径	残　高	突帯の成形・形態	刻み目	胎　土	色　　調	調　整　方　法	形　　態	備　　考
№ 11	深　鉢	33.8	4.5	端部に突帯の上端を沿わせて上から押えて貼り付ける。(b) 断面―扁平突帯の下側面はていねいなナデを施している。	B (浅いD字)	Ⅴ類	外内面とも明褐色	外面―ケズリ(条痕?) 内面―ケズリ	口縁部はやや内傾ぎみに上方へのび, 端部は丸い。	外面にスス付着
№ 7	〃	42.8	16.9	端部に突帯の上端を沿わせて上から押えて貼り付ける。(b)	B (D字)	Ⅴ類	―	外面―二枚貝条痕 内面―ていねいなナデ(板ナデ?)	口縁部はほぼ垂直に上方へのび, 端部は丸い。	輪積み痕残る。



図版6　前栽遺跡　土器(3)

(37・20・21・3・48・16・46:$\frac{1}{2}$, 50:$\frac{1}{1}$)



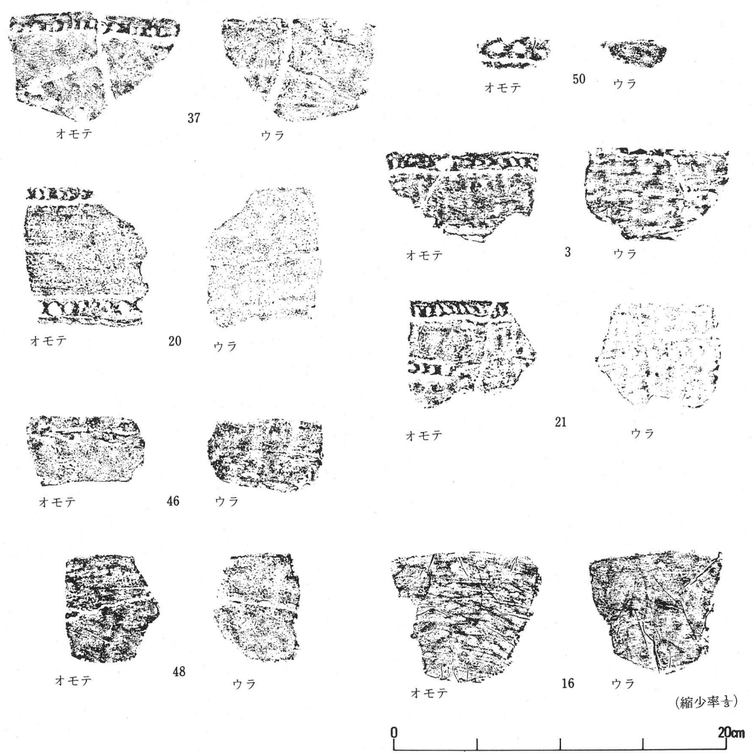
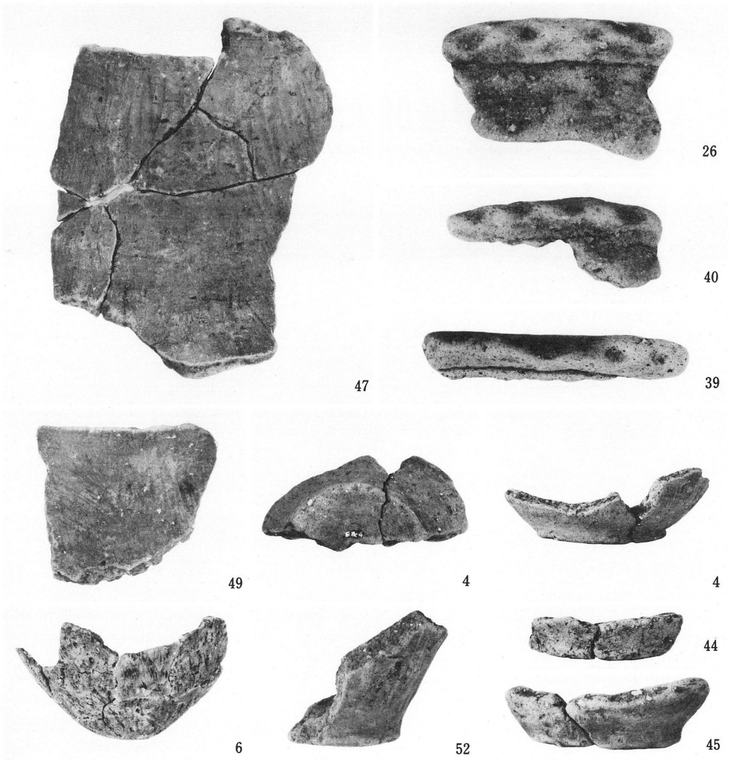


図17　前栽遺跡　土器実測図・拓影(3)

土器番号	器形	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 37	深鉢	17	6.3	口縁部内面と突帯上面を挟んで貼り付ける。(b′)	A＋B (粗悪)	Ⅱ類	外—にぶい褐色 内—にぶい黄橙色	外面—ナデ 内面—ナデ	口縁部はわずかに内傾し上方へのびる。端部は丸い。	
№ 50	〃	11	1.5	端部に上下から押え貼り付ける。(a)	C (O字)	Ⅴ類	外—にぶい赤褐色 内—褐灰色	外面—不明 内面—ナデ	口縁部は上方にのび，端部は丸い。	
№ 46	〃	28.2	3.95	剝離のため不明。	——	Ⅳ類	外内面ともにぶい橙色	外面—ナデ 内面—ナデ	口縁部は外反して上方にのびる。	
№ 3	〃	14.4	6.3	口縁部—端部に上から押えて貼り付ける。(b) 肩部—剝離	口縁部B (浅いD字)	Ⅱ類	外—黒褐色 内—明黒褐色	外面—ナデ 内面—ナデ	口縁部はやや内傾ぎみに上方へのび，端部は丸い。	
№ 21	〃	14.9	6.5	口縁部—端部に被さるように貼り付ける。(c′) 肩部—上下から押えて貼り付ける。(a) 断面—台形	口縁部—B (斜め) 肩部—B＋A	Ⅱ類	外—黒褐色 内—褐灰色	外面—横方向のナデ 内面—ナデ	体部はやや外上方にのび口縁部はわずかに内傾し上方にのびる。 肩部であまり屈曲しない。 端部—わずかに面をもつ。	口縁端部にも軽い刻み目をもつ。B 外面にスス付着

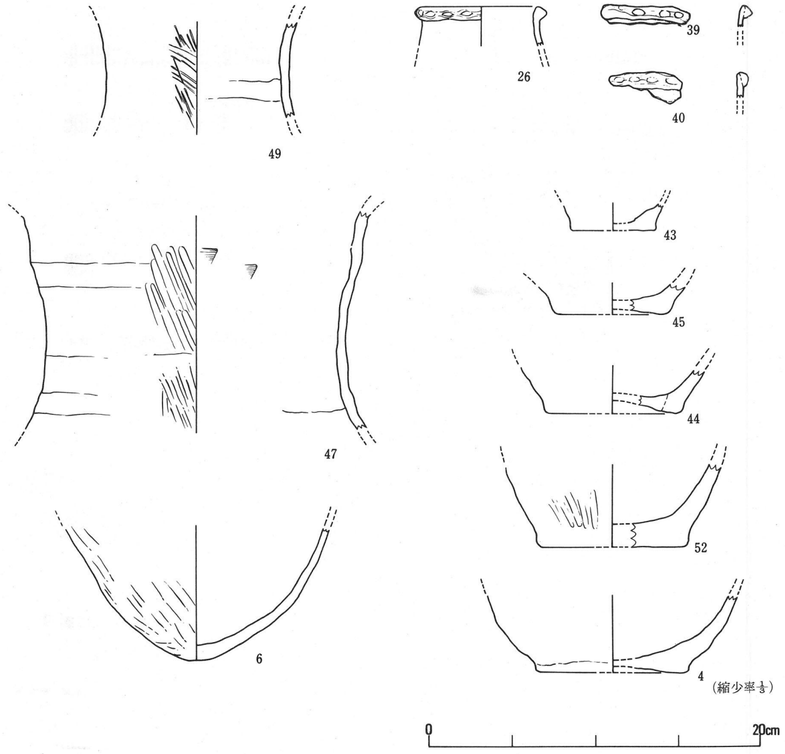
(単位：cm)　(注) 1. 刻み目の項目で（ ）内は「長原遺跡」の報告での分類を示す。 2. 小文字（ ）内は突帯の貼り付けの分類を示す。 3. 胎土の分類は奥田尚氏の分類を示す。（第6章第1節参照）

土器番号	器形	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 20	深鉢	24.5	9.4	口縁部—内面と突帯上面を挟んで貼り付ける。(b′) 肩部—上下から押えて貼り付ける。(a)	口縁部—B (D字) 肩部—A (粗悪)	Ⅳ類	外—にぶい褐色 内—にぶい橙色	外面—横方向のナデ 内面—ナデ	体部はやや外上方にのび肩部でわずかに屈曲し口縁部は上方へのびる。端部は丸い。	内面に輪積み痕
№ 48	浅鉢	22.5	5.7	——	——	Ⅴ類	外—にぶい褐色 内—にぶい橙色	口縁部外面軽い磨研 体部外面斜め方向のケズリ（下→上） 内面—ナデ	体部から口縁部にかけてスムーズに外上方へのびる。端部は丸い。	内外面にスス付着
№ 16	〃	17	6	——	——	Ⅱ類	外—褐色 内—にぶい褐色	外面—ていねいなミガキ 内面—ナデ	体部は内傾しながら上外方へのび口縁端部はやや内傾して丸くおさめる。 全体にボール型を呈している。端部より0.9㎝下に穿孔をもつ。	穿孔は二か所にあると推定される。 外面の一部にスス付着



図版7 前栽遺跡 土器(4)

(47・49・52:$\frac{1}{3}$, 4・44・45・6:$\frac{1}{4}$, 26・39・40:$\frac{1}{5}$)



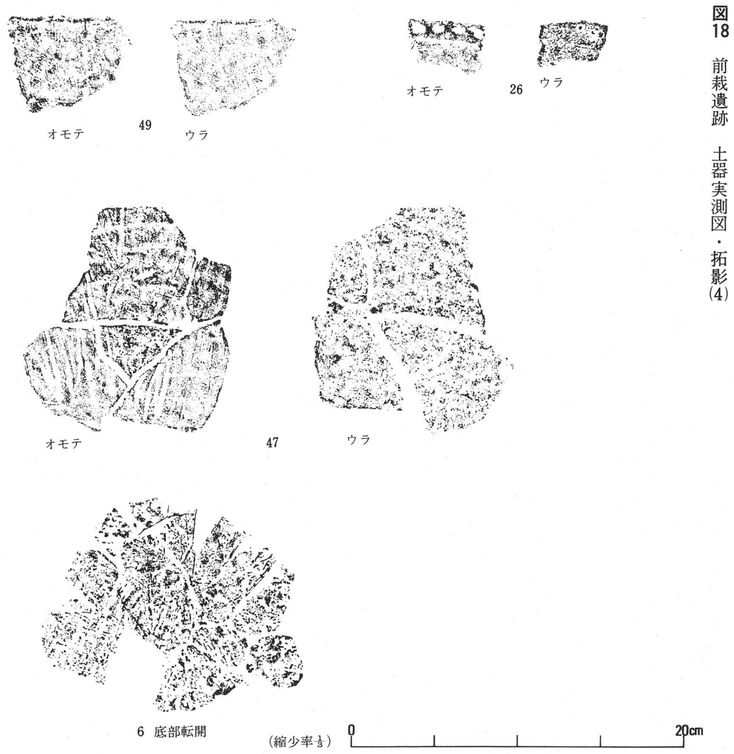
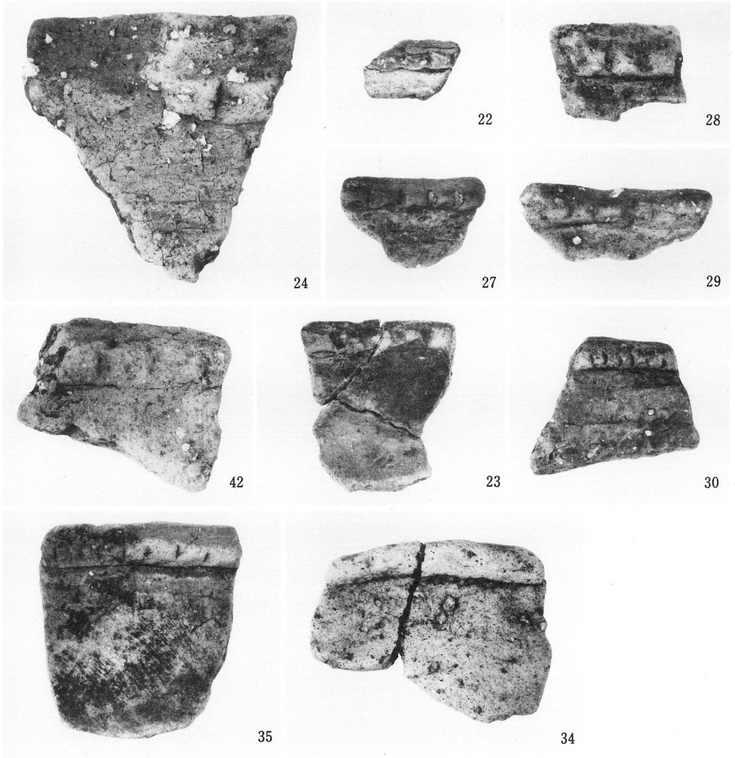


図18 前栽遺跡 土器実測図・拓影(4)

土器番号	器種	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 47	壺(頸部)	—	—	—	—	V類	外—にぶい灰黄褐色 内—灰白色	外面—ケズリ(上→下) 条痕(二枚貝?) 内面—剝離が激しいが一部に板ナデのようなものが残る。	—	内外面に輪積み痕
№ 49	〃	—	—	—	—	II類	外—明赤褐色 内—にぶい赤褐色	外面—縦および斜め方向の植物枝茎による条痕。 内面—ナデ	—	外面にスス付着 内面に輪積み痕
№ 26	〃	—	—	口縁端部に上下から押えて貼り付ける。(a)	C (横長O字)	V類	外—褐色 内—にぶい赤褐色	内外面とも不明	口縁部はやや内傾ぎみに上方へのび，端部は丸い。	器壁薄い 内外面の一部にスス付着
№ 39	〃 (口縁部片)	—	—	端部に上下から押えて貼り付ける。(a)	C (横長O字)	II類	内外面とも淡橙色	内外面とも不明	端部丸く，器壁薄い。	
№ 40	〃 (口縁部片)	—	—	端部に上下から押えて貼り付ける。(a)	C (不明瞭) 横長O字	V類	内外面とも明褐灰色	内外面とも不明	端部丸く，器壁薄い。	

(単位：cm)　(注) 1. 刻み目の項目で( )内は「長原遺跡」の報告での分類を示す。 2. 小文字( )内は突帯の貼り付けの分類を示す。 3. 胎土の分類は奥田尚氏の分類を示す。(第6章第1節参照)

土器番号	器種	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 6	底部	—	8	—	—	V類	外—橙色 内—黄灰色	外面—ケズリ(下→上) 内面—ナデ(不明瞭)	丸底—体部はやや内傾しながら上外方へのびる。	
№ 43	〃	復原底径 5.2	2	—	—	II類	外—褐灰色	底面—ナデ，体部外面—ナデ，体部内面—剝離のため不明	平底—底部側面は張出さないが立ち上りはきつい。	
№ 45	〃	〃 6	1.6	—	—	IV類	外面とも橙色	底面—不明，体部内外面—ナデ	中央ややくぼむ。	
№ 44	〃	〃 8.2	2.6	—	—	V類	外—明褐色 内—にぶい褐色	底面—不定方向のケズリ 体部内外面ともナデ	中央くぼむ。	
№ 4	〃	〃 11.2	4.6	—	—	I類	内外面ともにぶい褐色	底面—ケズリ 体部外面ケズリ(下→上) 体部内面ナデ	体部内傾しながら外上方へのびる。 底部—中央軽くくぼむ。	
№ 52	〃	9	4.8	—	—	IV類	外—橙色	体部外面—ヘラミガキ	体部—軽く内傾しながら外上方へのびる。 平底	内面に厚さ0.1cm～0.2cmで炭化物付着



図版8　前栽遺跡　土器(5)

(24・34・28・27・29・42・35・30:$\frac{1}{1}$，22・23:$\frac{1}{2}$)

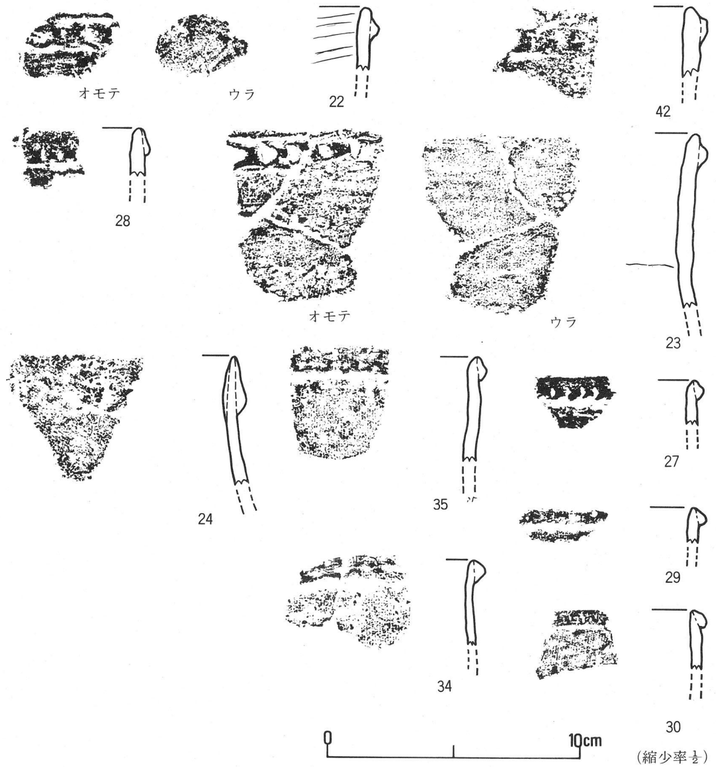


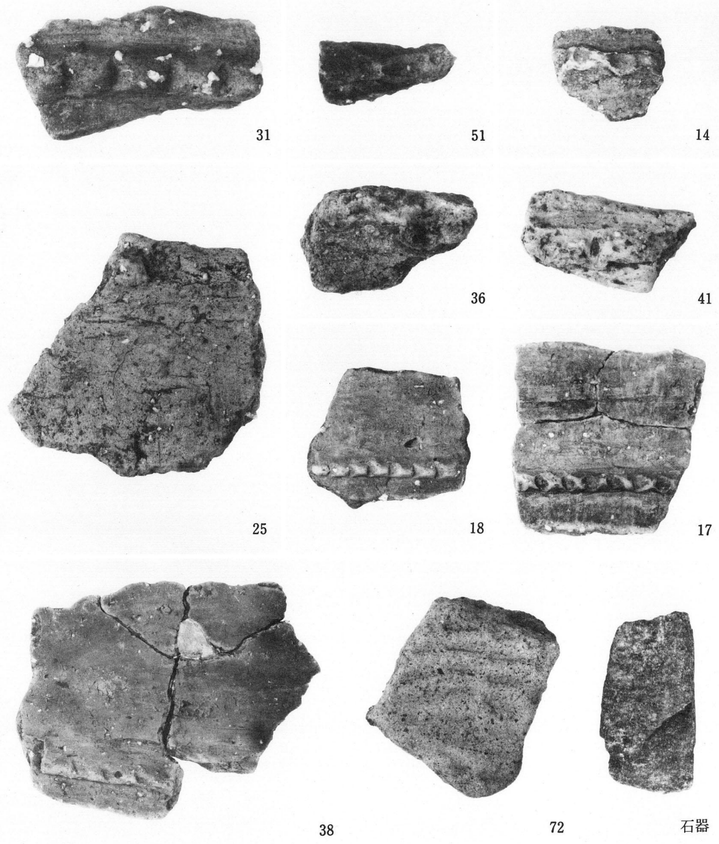
図19　前栽遺跡　土器拓影(5)

(縮少率$\frac{1}{2}$)

土器番号	器形	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 22	深鉢 (口縁部片)	——	——	端部から0.3cm下に上下から押えて貼り付ける。(a)	B (D字)	V類	外—明褐灰色 内—灰褐色	外面—横ナデ 内面—横方向のケズリ	口縁部は上方にのび，端部は丸い。	刻み目には2枚貝条痕の凸線がみられる。端部も浅い刻みを施す。
№ 23	〃	——	——	端部から約0.3cm下に上下から押えて貼り付ける。(a)	B (D字)	Ⅳ類	外—にぶい褐色 内—にぶい黄褐色	外面—横ナデ 内面—ナデ	口縁部は軽く外傾しながら外上方にのび，端部は丸い。	外面にスス付着
№ 28	不明 (口縁部片)	——	——	口縁部内面と突帯上面を挟んで貼り付ける。(b′) 断面扁平	A (V字)	V類	外—にぶい赤褐色 内—暗褐色	内外面とも不明 (磨滅が激しい)	口縁部は上方にのび，端部は丸い。	
№ 42	〃	——	——	口縁端部に上下から押えて貼り付ける。(a)	不明	Ⅳ類	外—にぶい橙色 内—橙色	内外面とも不明 (磨滅が激しい)	端部は丸い。	内面にスス付着
№ 24	深鉢 (口縁部片)	——	——	端部に被さるように貼り付ける。(c) (一部をのぞいて剝離)	B (浅いD字)	Ⅱ類	外—にぶい黄褐色 内—黒褐色	内外面とも不明 (磨滅が激しい)	口縁部は外傾ぎみに外上方へのび，端部は丸い。	

土器番号	器形	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 35	深鉢 (口縁部片)	——	——	口縁部内面と突帯上面をはさんで貼り付ける。(b′)	B (浅い)小さなデルタ状	V類	外—にぶい黄橙色 内—明赤褐色	外面—強いナデ（ハケ状に残る） 内面—不明	口縁部は内傾ぎみに上方へのび，端部は丸い。	
№ 27	不明 (口縁部片)	——	——	口縁部内面と突帯上面をはさんで貼り付ける。(b′)	A V字	Ⅱ類	内外面ともにぶい赤褐色	外面—ケズリ 内面—ナデ	口縁部はやや内傾し，上方へのびる。	
№ 29	〃	——	——	口縁端部に上下から押えて貼り付ける。(a)	A (浅いV字)	Ⅰ類	外—赤褐色 内—にぶい赤褐色	内外面ともナデ	口縁部はほぼ垂直にのび，端部は丸い。	
№ 30	深鉢 (口縁部片)	——	——	口縁端部に被さるように貼り付ける。(c) (玉縁状に小さくつく)	A (爪形文状)	Ⅳ類	外—にぶい赤褐色 内—にぶい褐色	外面—ナデ 内面—磨滅が激しく不明	口縁部は上方へのび，端部はやや鋭い。	
№ 34	不明 (口縁部片)	——	——	端部に上下から押えて貼り付ける。(a)	不明	Ⅳ類	外—灰白色 内—淡橙色	内外面とも不明	やや内傾ぎみに上方へのび，端部は丸く器壁薄い。	

(注) 1. 刻み目の項目で（ ）内は「長原遺跡」の報告での分類を示す。 2. 小文字（ ）内は突帯の貼り付けの分類を示す。 3. 胎土の分類は奥田尚氏の分類を示す。（第6章第1節参照）



図版9　前栽遺跡　土器(6)・石器

(31・51・25・41・36・72・石器:$\frac{1}{1}$，18・14・17・38:$\frac{1}{2}$)

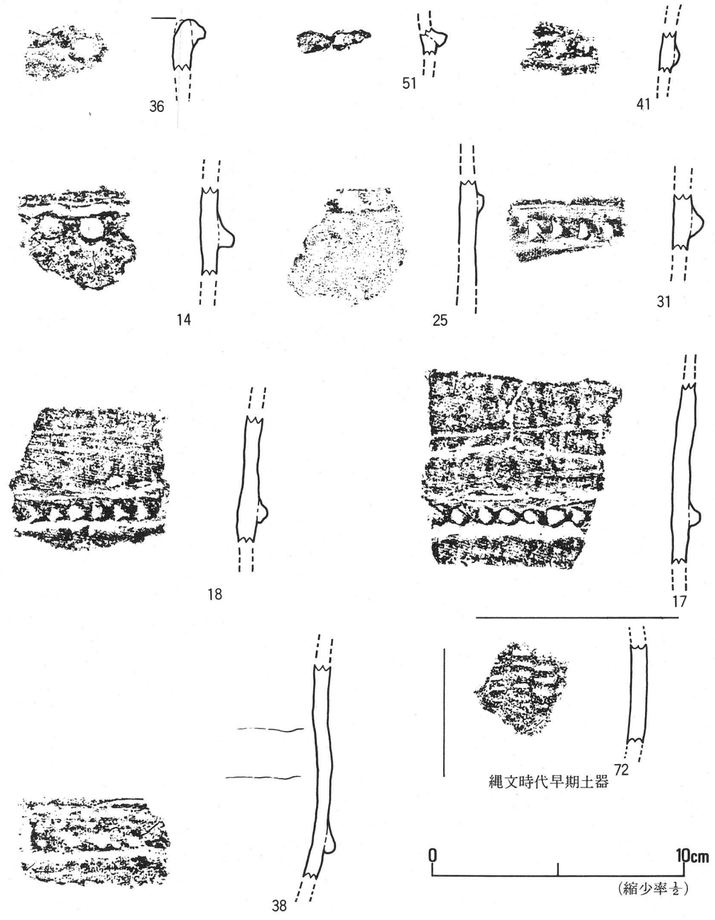


図20　前栽遺跡　土器拓影(6)

(縮少率$\frac{1}{2}$)

土器番号	器種	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 31	深鉢(体部片)	——	——	上下から押えて貼り付ける。(a)	B(D字)	Ⅱ類	外—にぶい黄褐色 内ススのため不明	外面—ナデ 内面—不明	肩部で屈曲しない。	内面にスス付着
№ 51	〃	——	——	上下から押えて貼り付ける。(a)	C(横長O字)	Ⅳ類	外—褐灰色 内—黒褐色	——	——	外面スス付着 突帯上部欠損している。
№ 41	〃	——	——	不明(bか？) 薄く扁平な断面	B(不明瞭)	Ⅴ類	内外面ともにぶい橙色	外面—ナデ 内面—不明	肩部で屈曲しない。	
№ 36	〃	——	——	上下から押えて貼り付ける。(a)	C(O字)	Ⅵ類	外—橙色 内—にぶい橙色	内外面とも不明	——	口縁端部の破片とおもわれる。
№ 25	〃	——	——	上下から押えて貼り付ける。(a) (ほとんど剝離している)	不明	Ⅱ類	外—にぶい黄褐色 内—不明(ススのため)	外面—ナデ 内面—ナデ	体部から口縁部にかけて上方にのびる。肩部の屈曲はみられない。	内面にスス付着

(注)　1. 刻み目の項目で（　）内は「長原遺跡」の報告での分類を示す。　2. 小文字（　）内は突帯の貼り付けの分類を示す。　3. 胎土の分類は奥田尚氏の分類を示す。（第6章第1節参照）

土器番号	器種	復原口径	残高	突帯の成形・形態	刻み目	胎土	色調	調整方法	形態	備考
№ 14	深鉢(体部片)	——	——	上下から押えて貼り付ける。(a) 突出ぎみ	C(O字)	Ⅵ類	外—褐灰色 内—にぶい黄褐色	外面—ナデ 内面—横ナデ	体部から口縁部にかけて上方にのびる。肩部屈曲しない。	
№ 18	〃	——	——	上下から押えて貼り付ける。(a)	B(規則正しい)	Ⅱ類	外—にぶい黄褐色 内—不明(ススのため)	外面——部に条痕（原体不明） 内面—ナデ	肩部で屈曲せず上方へのびる。	内面にスス付着
№ 38	〃	——	——	上から押えて貼り付ける。(b)	B(軽いD字)	Ⅱ類	外内面ともにぶい褐色	外面—ナデ 内面—ナデ	口縁部はやや内傾し上方へのびる。	
№ 17	〃	——	——	——	B(D字)	Ⅲ類	外—橙色 内—にぶい橙色	外面—ヘラナデ(横方向) 内面	口縁部はほぼ垂直に上方へのびる。	外面にスス付着
№ 72	〃	——	——	——	——	——	外—灰褐色 内—暗灰褐色	——	——	

第6章　前栽遺跡の自然科学的研究

第1節　前栽遺跡縄文晩期土器の胎土の観察

奥　田　尚*

Ⅰ．はじめに

近年になって，胎土分析は様々の方法で行なわれるようになった。また，胎土から土器の製作地の推定がなされるようになった。胎土分析の方法としては，X線粉末法により鉱物種を調べる方法，蛍光X線により特定の元素の量比を調べる方法，肉眼観察により胎土中の砂礫種とその形・量比を調べる方法，偏光顕微鏡により薄片中に含まれる砂礫種とその形・量比を調べる方法等がある。蛍光X線による方法は胎土のごく一部を調べているのみであるため，胎土分析と言うよりも産地推定方法と言う方が良いかも知れない。X線粉末法による方法，偏光顕微鏡による方法は調べる面積，体積が量的に僅かであるため，調べた試料が土器全体の組成を代表しているか検討を要する。

今回使用した方法は肉眼で土器破片中に含まれる砂礫種とその形・量を調べる方法である。最初，土器全体を裸眼で観察し，次に実体鏡（倍率30倍）で観察した。観察した結果をもとに，その砂礫種構成から砂礫の採取地は推定されるが，観察に使用した試料は細かい破片が多く，この破片の1個が1個体を示すか，また，1個体全体の胎土を代表するものであるかは不明である。よって，観察した試料は出土地へ搬入された量，在地で作られた量等を議論できる条件を満たすものではない。

土器の製作地を推定する場合，いろいろな条件が考えられるが，製作地近くの粘土や砂礫を利用するのが一般的であると考えられる。

Ⅱ．砂礫種構成

土器の胎土に含まれる砂礫種は，岩石破片として，花崗岩，閃緑岩，チャート，砂岩，変輝緑岩，結晶片岩，火山ガラス，鉱物破片として，石英，長石，雲母，角閃石，柘榴石である。花崗岩とし

* 八尾市立刑部小学校教諭，奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託

たものには，造岩鉱物が石英・長石・黒雲母，石英・長石，石英・黒雲母，長石・黒雲母である場合がある。閃緑岩としたものには，石英・角閃石，長石・角閃石，長石・黒雲母・角閃石である場合がある。チャートは灰色，暗灰色，赤褐色等と様々の色を呈する亜角礫，亜円礫である。結晶片岩は，角礫，亜角礫，亜円礫で，石英片岩，絹雲母片岩，黒雲母石英片岩である。火山ガラスは無色透明，黒色透明で貝殻状の破片である。無色透明の場合が多い。石英は無色透明，白色透明で，角が僅かに円くなった角礫が多く，亜角礫は僅かである。白色透明の石英は粗粒の場合に多い。また，結晶面のある石英は認められない。長石は白色で，角礫，亜角礫である。新鮮な無色透明の長石は認められない。雲母は黒雲母と白雲母である。黒雲母は黒色粒状，黒色柱状，金色板状の場合がある。六角形板状の黒雲母は認められない。角閃石は黒色粒状で，角礫である。3試料中には結晶面の認められるものもある。柘榴石は赤褐色で偏菱二十四面体の自形である。2試料に認められる。

胎土の砂礫種構成をもとに区分すれば，Ⅰ～Ⅵ類型になる。

Ⅰ類型：結晶片岩が含まれる

Ⅱ類型：裸眼で角閃石が確認され，結晶片岩，チャートが含まれない。

Ⅲ類型：裸眼で角閃石が確認され，結晶片岩が含まれず，チャートが含まれる。

Ⅳ類型：鏡下で角閃石が確認され，結晶片岩が含まれず，チャートが含まれる。

Ⅴ類型：鏡下で角閃石が確認され，結晶片岩，チャートが含まれない。

Ⅵ類型：Ⅰ類型からⅤ類型のいずれにも含まれない。

Ⅲ．各類型の特徴

Ⅰ～Ⅵ類型の各特徴について述べる。

Ⅰ類型：Ⅰ類型は岩石破片として，花崗岩，閃緑岩，結晶片岩，鉱物破片として，石英，長石，雲母，角閃石の砂礫で構成される。

花崗岩は1試料を除いて全てに認められ，白色，灰白色で，角礫，亜角礫である。角がごく僅かに円くなった角礫が多い。粒径は1㎜から7㎜で，大きな粒径のものは僅かである。造岩鉱物が石英・長石・黒雲母の場合は僅かで，石英・長石，長石・黒雲母，石英・黒雲母の構成の場合が多い。便宜上，後者の場合も花崗岩とした。閃緑岩は鏡下で1試料にのみ認められ，灰色で，亜円礫である。粒径は粗粒である。結晶片岩は石英片岩，絹雲母片岩，黒雲母石英片岩で，いずれの試料にも認められ，無色透明，灰色，灰白色で，角礫，亜角礫，亜円礫である。粒径は裸眼で認められる場合，最大4㎜で，鏡下では中粒から粗粒である。石英は白色透明，無色透明で，角礫，亜角礫である。裸眼で認められる場合，実体鏡下でのみ認められる場合がある。量は中程度か僅かである。長石は試料によって認められない場合もあり，白色で，角礫，亜角礫である。粒径は1㎜から2㎜で，量が僅かである。雲母は黒雲母と白雲母である，1試料にのみ認められず，黒色板状・粒状，金色

板状，無色透明板状である。白雲母は僅か1試料に認められるのみである。黒雲母は裸眼で認められる場合，粒径が0.5㎜から2㎜で，試料によってはごく稀に6㎜に及ぶ。鏡下で認められる場合は細粒から粗粒である。量は僅か中程度である。白雲母は鏡下でのみ認められ，無色透明板状で，粗粒である。量は僅かである。角閃石は全ての試料に認められ，黒色粒状で，角礫，亜角礫である。ごく僅かに角が円くなった亜角礫が多い。粒径は裸眼で認められる場合，0.5㎜から2㎜で，鏡下では，細粒から粗粒である。量は試料によって異なり，僅かから多い場合まである。

Ⅱ類型：Ⅱ類型は岩石破片として，花崗岩，閃緑岩，変輝緑岩，火山ガラス，鉱物破片として，石英，長石，雲母，角閃石の砂礫で構成される。

花崗岩は1試料を除いて全てに認められ，灰白色で，角礫，亜角礫である。角がごく僅かに円くなった角礫が多い。粒径は1㎜から6㎜で，稀に8㎜に及ぶ。量は多い場合もあるが，僅かかごく僅かの場合が多い。造岩鉱物は石英・長石からなる場合が多く，稀に石英・長石・黒雲母からなる場合がある。閃緑岩は鏡下にて2試料に認められ，暗灰色で，角が僅かに円くなった角礫である。粒径は中粒で，量がごく僅かである。造岩鉱物は石英・角閃石である。変輝緑岩は灰色で，角が僅かに円くなった角礫である。粒径は1.5㎜から2㎜で，量はごく僅かである。火山ガラスは鏡下で1試料にのみ認められ，無色透明で貝殻状破片である。粒径は細粒で，量がごく僅かである。石英は無色透明，白色透明で，角礫，亜角礫である。角が僅かに円くなった角礫が多い。粒径は1.5㎜から2㎜で，稀に6㎜に及ぶ。量は中程度の場合もあるが，ごく僅かの場合が多い。長石は試料によっては認められない場合もあり，白色，無色透明で，角礫である。粒径は0.5㎜から3㎜で，稀に4㎜に及ぶ。量は中程度の場合もあるがごく僅かの場合が多い。雲母は黒雲母と白雲母であり，白雲母は1試料にのみ僅かに認められる。裸眼で認められる試料は僅かで，鏡下で認められる場合は多いが，全く認められない場合もある。黒雲母は黒色板状の場合が多く，黒色粒状，金色板状の場合もある。粒径は0.5㎜から3㎜で，ごく稀に4㎜に及ぶ。鏡下では粗粒から細粒まで認められる。量は多い場合もあるが，ごく僅かの場合が多い。白雲母は鏡下で認められ，無色透明板状で，粒径が粗粒である。量はごく僅かである。角閃石はすべての試粒に認められ，裸眼で確認される。黒色粒状で，角がごく僅かに円くなった角礫である。粒径は0.5㎜から2㎜であり，稀に6㎜に及ぶ。量は非常に多い場合からごく僅かの場合と変化がある。№38，№71の試料には結晶面をもつ角閃石が鏡下で認められる。

Ⅲ類型：Ⅲ類型は，岩石破片として，花崗岩，チャート，変輝緑岩，火山ガラス，鉱物破片として，石英，長石，雲母，角閃石である。

花崗岩は試料によっては認められない場合もある。灰色で，角礫，亜角礫である。粒径は1㎜から5㎜である。量は中程度からごく僅かの場合まである。造岩鉱物は，石英・黒雲母，石英・長石である。チャートは赤褐色，茶褐色，灰色で，角礫，亜角礫である。粒径は1㎜から4㎜で，量はごく僅かである。変輝緑岩は1試料にのみ認められ，暗灰色で，亜円礫である。粒径は3㎜で，量

がごく僅かである。火山ガラスは1試料にのみ，鏡下で認められ，無色透明貝殻状，針状の破片である。粒径は中粒から細粒で，量はごく僅かである。石英は全ての試料に認められ，無色透明，白色透明で，角礫，亜角礫，亜円礫である。粒径は0.5㎜から3㎜である。量は僅かかごく僅かである。長石は2試料に認められ，角礫である。粒径は0.5㎜から1.5㎜である。量は中程度である。雲母は全ての試料に認められ，1試料には白雲母が認められる。黒雲母は黒色板状・粒状，金色板状で，粒径が0.5㎜から3㎜である。量は中程度から僅かである。白雲母は鏡下で1試料に認められ，無色透明板状である。粒径は粗粒で，量が僅かである。角閃石は全ての試料に裸眼で認められ，黒色粒状で，角が僅かに円くなった角礫である。粒径は0.5㎜から2.5㎜で，量が僅かかごく僅かである。№12の試料には黒色柱状で，結晶面が認められるものもある。

Ⅳ類型：Ⅳ類型は，岩石破片として，花崗岩，閃緑岩，チャート，火山ガラス，鉱物破片として，石英，長石，雲母，角閃石の砂礫で構成される。

花崗岩は1試料を除いて全ての試料に含まれ，角礫，亜角礫である。粒径は0.5㎜から5㎜で，稀に7㎜に及ぶ。量は僅かかごく僅かである。造岩鉱物は石英・長石からなる場合が多く，ごく僅かに石英・長石・黒雲母の場合がある。閃緑岩は№32の試料にのみ認められ，暗灰色で亜角礫である。粒径は2.5㎜で，量がごく僅かである。造岩鉱物は石英・角閃石である。チャートは黒褐色，暗灰色，茶褐色，灰色，白色で，亜角礫・亜円礫である。粒径は1㎜から5㎜で，量が僅かである。火山ガラスは№30，№32の試料に鏡下で認められ，無色透明，白色透明で角礫である。粒径は0.5㎜から3㎜で，鏡下では粗粒から細粒である。量は中程度から僅かである。長石は1試料を除いて全てに認められ，白色で，角礫である。粒径は0.5㎜から3㎜で，鏡下では中粒から細粒である。量は僅かかごく僅かである。雲母は黒雲母と白雲母で，鏡下で認められる場合が多く，2試料に認められない。黒雲母は黒色板状，金色板状である。粒径は裸眼では1㎜から2㎜で，鏡下では中粒から微粒である。量は僅かかごく僅かである。白雲母は鏡下で2試料にのみ認められ，無色透明板状・粒状である。粒径は中粒から細粒で，量が僅かかごく僅である。角閃石は黒色粒状で，全ての試料に鏡下で認められ，角礫である。粒径は中粒から微粒で量は中程度からごく僅かである。

Ⅴ類型：Ⅴ類型は，岩石破片として，花崗岩，閃緑岩，砂岩，火山ガラス，鉱物破片として，石英，長石，雲母，角閃石の砂礫で構成される。

花崗岩は全ての試料に認められ，灰白色で角礫，亜角礫である。粒径は0.5㎜から7㎜である。量は僅かかごく僅かである。造岩鉱物は石英・長石からなる場合が多く，石英・長石・黒雲母からなる場合はごく僅かである。閃緑岩は5試料に認められ，暗灰色で，角礫である。粒径1㎜から2㎜で，鏡下では粗粒である。量はごく僅かである。造岩鉱物は石英・角閃石，長石・角閃石である。砂岩は1試料にのみ認められ，灰色で，亜角礫である。粒径は9㎜で，量がごく僅かである。構成砂粒は石英が多く，長石，黒雲母，角閃石である。火山ガラスは1試料にのみ鏡下で認められ，無色透明針状である。粒径は細粒で量がごく僅かである。石英は鏡下にて認められ，無色透明で，角

礫・亜角礫である。粒径は0.5㎜から3㎜で，鏡下では粗粒の場合が多い。量は中程度からごく僅かの場合まである。長石は2試料に認められないが，白色で，角礫，亜角礫である。粒径は0.5㎜から3㎜で，稀に4㎜に及ぶ。量は僅かかごく僅かであり，鏡下では多い場合もある。白雲母は無色透明板状で，鏡下にて1試料にのみ認められる。粒径は中粒から細粒で，量がごく僅かである。角閃石は鏡下にて全ての試料に認められ，角礫，亜角礫である。粒径は粗粒の場合もあるが，中粒から細粒の場合が多い。

Ⅵ類型：Ⅰ類型からⅤ類型のいずれにも含まれない試料を集めたのみである。

Ⅳ．砂礫の採取地

各類型の構成砂礫の採取できる地域を天理市前栽遺跡を中心にして，近距離で求める。

Ⅰ類型は結晶片岩が含まれ，石英が少ない。結晶片岩の分布地，供給される砂礫層が奈良盆地内では見られない。結晶片岩は紀ノ川流域の三波川帯や中国山地中央部の三郡変成帯に分布する。距離的には紀ノ川流域が近距離である。

Ⅱ類型，Ⅲ類型には，裸眼で角閃石が認められ，砂礫粒形は角礫であってもごく僅かに角に円みがある。Ⅲ類型ではチャートが含まれる。砂礫粒の角に円みがあることから，川原や砂礫層中の砂礫であると推定される。遺跡近辺でⅡ類型やⅢ類型の砂礫が採取できるか，今後，検討する必要がある。

Ⅳ類型とⅤ類型の違いはチャートの有無である。遺跡近くを流れる布留川の砂礫はチャートが僅かしか含まれず，角閃石が鏡下で認められる。布留川の砂礫を採取して土器を作れば，Ⅳ類型かⅤ類型の砂礫構成を示す土器が作れるであろう。

Ⅵ類型はその他に相当するものであることから，推定しがたい。

現在のように機械力によって土砂が運搬できない縄文晩期には，粘土や砂礫を遺跡付近まで運び，土器を作ったと考えるよりも，作られた土器を運んできたと推定する方が妥当であろう。後者の思考をもとにすれば，当遺跡出土の土器には，紀ノ川流域から運ばれたものと，遺跡付近で作られたものとがある。

表3　前栽遺跡縄文時代土器の胎土観察表

類型	試料番号 ＼ 砂礫種 観察条件	岩石破片													
		花崗岩		閃緑岩		チャート		砂岩		変輝緑岩		結晶片岩		火山ガラス	
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍
Ⅰ	4	L—△											L—△		
	29	L ×											L ×		
	72											M—△	L—□		
Ⅱ	1	L—△	L—△												
	3														S ×
	5	L—×													
	16	L ×													
	18	L—△													
	21	L △	L ×												
	24	L—△	L ×												
	27	M—×													
	31	L—△													
	37	L ×													
	38	L—△													
	39	L ×			M ×										
	43	L—×	L ×												
	49	L △	L ×		M ×					L ×					
Ⅲ	2	L—□	L △			L ×									
	8	L—×	L ×			L—×	M ×			L ×					
	17	L—△				L ×									
Ⅳ	20	L—△	L ×			L △									S △
	23	L—×	L ×			L ×									
	30	L ×	L ×				M ×								S ×
	32	L—×		L ×		L ×									M ×
	42	L—×	L ×			L ×									
	45	L—△	L △			L—×									
	46	L—×	L ×			M ×									
	51	L—△	L ×		L ×	L ×									
	52	L—×				M ×									
Ⅴ	6	L—△			L ×										
	7	L ×													
	9	L ×						L ×							
	10	L—△			L ×										
	11	L—△	L—×												
	15	L—△	L—×												S ×
	22	L—△													
	25	L—△													
	26	L—△			L ×										
	28	L ×													
	34	L—△	L ×												
	35		L ×												
	40	L—△													
	41	L—×	L ×		L ×										
	44	L △													
	47	L—×													
	48	L—×	L ×												
	50	L ×													
Ⅵ	14	L—△	L △												
	36	M—×	L ×												

（例言）　裸眼での観察
L＝2mm 以上の粒径
M＝2mm 未満，1mm 以上の粒径
S＝1mm 未満，0.5mm 以上の粒径
SS＝0.5mm 未満の粒径
—　は以下もあるを示す
◎＝非常に多い
○＝多い
□＝中程度
△＝僅か
×＝ごく僅か
W＝白雲母
Wのない雲母はすべて黒雲母
（　）は含まれることもある
Eは自形を示す

（奥田　尚　作成）

鉱物破片								備考
石英		長石		雲母		角閃石		
裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
	M—△	L—×		L ×	L—△	L—□	M—○	結晶片岩が含まれる。72は早期土器。
S ×	M—△				S—△		S—△	
	M—×					M—○	L—○	
L—△	L—△	L—□	M—△	S ×	S S—×	L—×	S ○	裸眼で角閃石が確認され結晶片岩，チャートが含まれない。
L—×	M—×		L ×	M—△	L—△(W)	L—×	L—□	
L—△	S—×	L—△	M—△	L—×	M ×	M—○	M—◎	
L ×	M—×			L—○	L—○	L—×	M—□	
	M—×	L—×	M ×		M ×	L—×	M—○	
L—△	L—△			L—△	M—□	L—×	M—□	
L—□	L—△	L—□	M □		M △	M—×	L—○	
M—×	M—□				S S△	M—×	M—□	
L—×	L—△	L—×	L—△		L—○	L ×	S ×	
M—×	L—×	L—△	S S×	M ×	M—×	M—△	M—◎	
M—×	L—×	M—△	S ×		M ×	M—×	L—○(E)	
M ×	L—×	L—×	S ×		M ×	M—×	M—○	
L—×	L—△	M ×	M △	M ×	M ×	M—×	M—□	
L—×	L—△	L—×	L ×		M ×	M—×	S ×	
L—×	L—△			L—△	M—□	M—△	S △	裸眼で角閃石が確認され結晶片岩が含まれず，チャートが含まれる。
L—×	L—△			L—□	M ×	L—△	M—△	
M—×	L—×	M—△			L—×(W)	S S△	L—△	
M—○	L—□	M—□	M □		L ×		L △	鏡下で角閃石が確認され結晶片岩が含まれず，チャートが含まれる。
L—□	L—△	L—△	M △	L ×	M ×		S △	
L—×	M—×	M ×	S ×	L	M—×(W)		M △	
L—×	M—△	L—×	S ×	L ×	M—△(W)		M □	
L—△	M—△	L—×	M ×				S ×	
M—△	L—□				M—×		S △	
L—△	M—△	M △					S ×	
M ×	L—△	L—×			S S×		S △	
M—△	M—○	L—△	M ×		S ×		S △	
M—×	L—×	L—×	S ×		M ×		S ×	鏡下で角閃石が確認され結晶片岩，チャートが含まれない。
L—×	S—×		S S×		M—×(W)		S ×	
	S—△	M—×	S ×		S △		S □	
	L—×	M—×	L—△	M—×	M—△		S ○	
	M—×			L—△	L—○		M ×	
L—×	M—△	L—×	L ×		M—△(W)		S S△	
M—□	L—□	L—□	M—△	S S△	M □		S □	
L—□	L—△	M—△		M ×	S S×		M ○	
L—△	L—×	L—×		M—×	L—□		M △	
	L—△	M—△	M ×	M—×	M △		S □	
L—×	M—×	L—×		M ×			L—□	
L—×	L—□	M—△	M—□				S ×	
L—×	L—□	M—×			M ×		S □	
L—△	L—△	M ×		L ×	S S△		S S△	
M—×	L—□	L—×	L △	L—△	M △		S ○	
M—×	L—△	L—△	M ×				S △	
M—△	S—□	L—△		L—×			S ×	
M ×	L—×	M—×	M ×				S □	
M—△	S—△	L—△	S △	M ×	M—△			Ⅰ類型からⅤ類型のいずれにも含まれない。
L—×	M—□	M—△	M □		L—×			

実体鏡30倍での観察

L＝裸眼でMに相当

M＝裸眼でSに相当

S＝裸眼で 0.5mm 未満，0.1mm 以上に相当

S S＝裸眼で 0.1mm 未満に相当

◎，○，□，△，×については鏡下で裸眼と同様の量とした。量については数的な扱いをした。面的，体積的な取り扱いではない。

第２節　前栽遺跡河川跡堆積土の花粉分析

金　　原　　正　　明*

河川跡の西壁より採取された試料10点について花粉分析を行った。

1.　試　料　（図21）（　）内は断面土層番号

試料１(3)たいへんよく引き締った灰色のシルト質粘土で雲母片を含む。

試料２(4)軟弱な青灰色の細砂で雲母片を含む。

試料３(5)やや引き締った黒灰色のシルト質粘土で雲母片を含む。他に草本片も多く含んでいる。

試料４(7)よく引き締った黒色の粘土で雲母片を含む。

試料５(8)やや軟弱な灰色のシルト質の細砂で雲母片を含む。

試料６(9)灰白色の中粒～粗粒の砂で石英・長石・雲母・花崗岩の破片から成る。

試料７(10)軟弱な灰黒色の粘土で中粒～粗粒の砂を含む。

試料８(23)よく引き締った黒色の細砂でシルトと中粒～粗粒の砂を含む。著しく炭化した微細な植物遺体を多く含む。

試料９(20)たいへんよく引き締った黒色のシルトで細砂を混える。

試料10(22)粘土と細砂の混じる青灰色のシルトで雲母を含む。

2.　方　法

ｉ）約20ｇの試料を５％水酸化カリウム水溶液に一昼夜浸した後，篩で大型植物遺体・礫等を除去する。

ii）傾斜水洗法によって水洗と微細粒子の除去を行なう。

iii）30％フッ化水素酸で処理した後，水洗を行なう。以下の水洗には遠心分離機を使用した。

iv）アセトリシス処理を行った後，水洗を行なう。

ｖ）石炭酸フクシンで染色を行ない，グリセリンゼリーで封入する。

検鏡は樹木花粉（ＡＰ）が200個以上になるまで行い，その間に出現した草本花粉（ＮＡＰ），シダ植物胞子（ＦＳ）の計数を行った。花粉量の少ない試料は樹木花粉が200個に満たないものがあった。

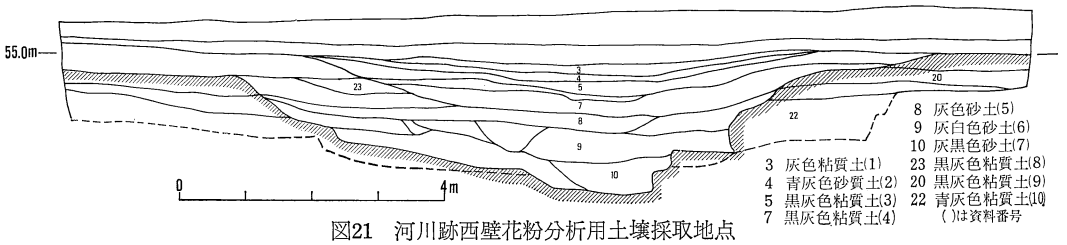


図21　河川跡西壁花粉分析用土壌採取地点

＊ 天理大学附属天理参考館

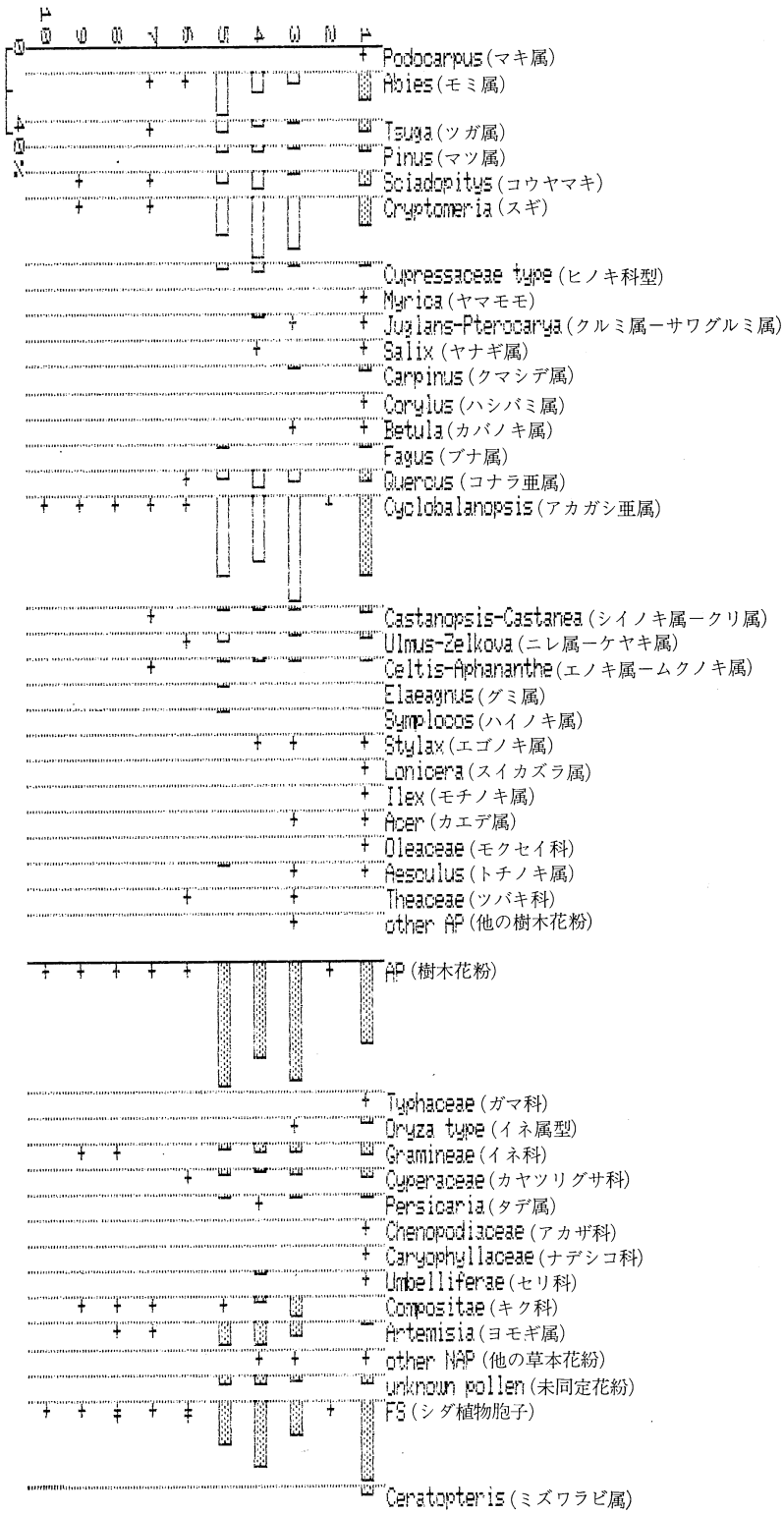


表４　前栽遺跡河川跡土壌花粉ダイヤグラム

Quercus はコナラ亜属とアカガシ亜属を識別し，Quercus, Cyclobalanopsis と表した。識別が困難なタクサはハイフンで結んだ。識別がやや困難で他のものを含む可能性のあるものは type を付加した。

結果は花粉ダイヤグラムにして表した。各樹木花粉は樹木花粉の合計を基数とした百分率で表示し，他は全花粉・胞子を基数とした百分率で示した。基数が200に満たないものでも120以上のものは白抜きで表示した。花粉量が著しく少なく，相対頻度の表示のできないものについては，＋印で表わし，その中でも特に多いものは＋＋で表した。

3.　結　果（表4，写真6・7）

試料2・6～10（4）（9・10・23・20・22）は花粉量が極端に少なく，相対頻度を表示することができなかった。

試料3～5（5・7・8）にはアカガシ亜属が高率に産し，スギ，モミ属，コナラ亜属もやや高率に産する。低率ながらも広葉樹ではシイノキ属—クリ属，エノキ属—ムクノキ属，ニレ属—ケヤキ属，針葉樹ではツガ属，ニヨウマツ亜属，コウヤマキ，ヒノキ科型が伴なわれる。モミ属は上位に向って減少傾向を示す。草本花粉ではヨモギ属，キク科，イネ科，カヤツリグサ科，タデ属が安定して産する。草本花粉の中ではヨモギ属が優占する。樹木花粉が全花粉・胞子で占める割合は高い。シダ植物の胞子も多産する。

試料1にはアカガシ亜属が高率に産し，モミ属，スギがやや高率に産する。他にコナラ亜属，シイノキ属—クリ属，ニレ属—ケヤキ属，ツガ属，ニヨウマツ亜属，コウヤマキが伴なわれる。草本花粉では下位に比べてヨモギ属，キク科が減少し，イネ科，カヤツリグサ科がやや増加する。低率ではあるがイネ属型とミズワラビ属が産する。草本花粉が全花粉・胞子で占める割合は低い。

本遺跡の試料は炭化した微細な植物遺体を多く含んでおり，それらは花粉粒との分離が容易でなかった。特に試料5・6・7（8・9・10）では非常に多く認められ，そのほとんどが広葉樹の材片であった。試料3では著しい草本性植物遺体が認められた。

4.　花粉化石群集と森林植生について

奈良盆地における後期完新世の花粉帯は松岡（1984）により設定され，金原（1984）によって，一部年代の改変と細分が行なわれた。

1）　Cyclobalanopsis 帯（約5,000～1,300Y. B. P.）

　i）　Cyclobalanopsis 亜帯（約5,000～2,500Y. B. P.）

　ii）　Cyclobalanopsis-Cryptomeria 亜帯（約2,500～1,700Y. B. P.）

　iii）　Cyclobalanopsis Ⅱ亜帯（約1,700～1,500Y. B. P.）

　iv）　Cyclobalanopsis-Cryptomeria-Pinus (Diploxylon) 亜帯（約1,500～1,300Y. B. P.）

2）　Pinus (Diploxylon)-Cyclobalanopsis 亜帯（約1,300Y. B. P. 以降）

　i）　Pinus (Diploxylon)-Cyclobalanopsis 亜帯（約1,300～500Y. B. P.）

　ii）　Pinus (Diploxylon) 亜帯（約500～200Y. B. P.）

iii)　Cryptomeria-Pinus (Diploxylon) 亜帯（約200Y．B．P．以降）

本遺跡の試料は明らかに Cyclobalanopsis 帯の Cyclobalanopsis-Cryptomeria 亜帯に比定される。Cyclobalanopsis 帯では奈良盆地底部はイチイガシ，シイなどを主とした照葉樹林におおわれていたと推定されている（松岡，1984)。

5.　本遺跡周辺の環境

試料3～5(5・7・8)より推定される本遺跡周辺の縄文時代晩期は，カシ類を主とする照葉樹林が周囲をおおっていた。その照葉樹林にはスギ等の針葉樹も混在していたと考えられる。そして周辺にはシダ植物，ヨモギ類，キク科が生育し，やや乾燥した環境であった。

試料1の時期になるとイネ属型花粉が低率ながらも出現するため，稲作が開始されたと推定される。しかし，その稲作はかなり小規模であり，周囲は依然森林におおわれていた。

奈良盆地で稲作の開始される時期はおよそ2300～2400年前と推定され（金原，1984)，加曽利（中村，1980）では約2300年前，茂呂（辻ほか，1983）では2300年前頃である。試料3～5は稲作開始年代と花粉帯の時期より，およそ2400～2500年前頃と考えられる。

（引用・参考文献）

松岡数充（1984）花粉分析よりみた奈良盆地及びその周辺における35,000Y．B．P．以降の森林植生変遷，埋蔵文化財天理教調査団編「奈良盆地の古環境」

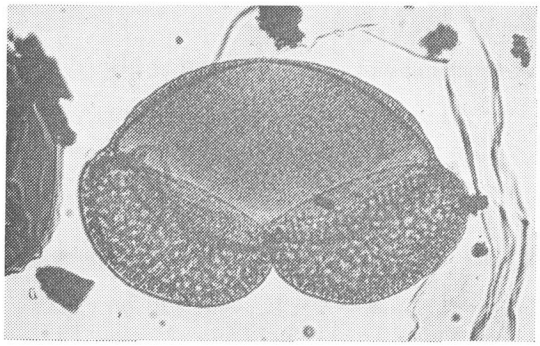
金原正明（1984）後期完新世の植生変遷，埋蔵文化財天理教調査団編「奈良盆地の古環境」

西田史朗　松岡数充（1971）完新世奈良盆地の自然史―その1―，奈教大古文化財教研報№6，p.65～81

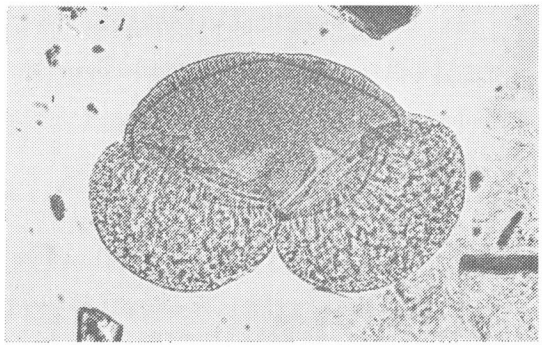
西田史朗　松岡数充　野口寧世　金原正明（1979）完新世奈良盆地の自然史―その3―，奈教大古文化財教研報№8，p.31～44

中村純（1980）花粉分析による稲作史の研究，「考古学・美術史の自然科学的研究」日本学術振興会 p.185～204

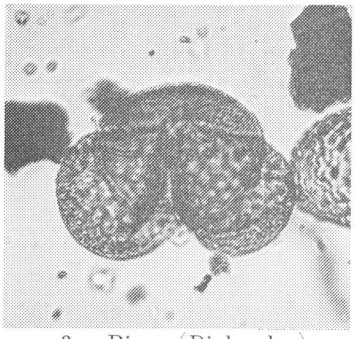
辻誠一郎　南木睦彦　小池裕子（1983）縄文時代以降の植生変化と農耕―村田川流域を例として―，第四紀研究　22(3)，p.251～266



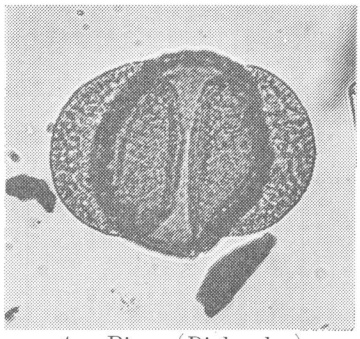
1.　Abies



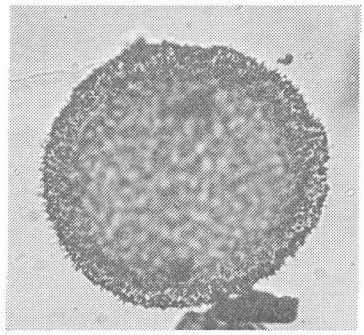
2.　Abies



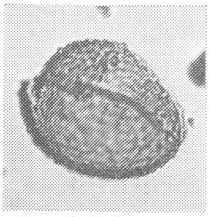
3.　Pinus (Diploxylon)



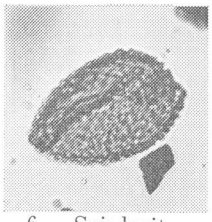
4.　Pinus (Diploxylon)



4.　Tsuga

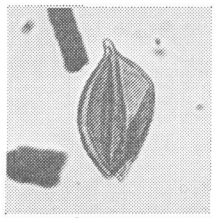


5.　Sciadopitys



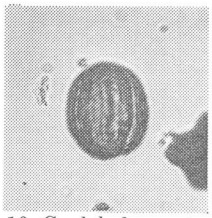
6.　Sciadopitys

7.　Cryptomeria

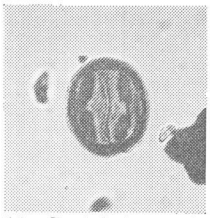


8:　Cryptomeria

9. Cupressaceae type

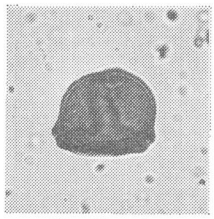


10. Cyclobalanopsis



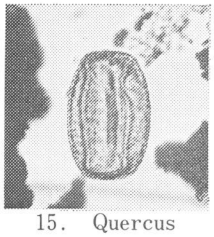
11. Cyclobalanopsis

12. Cyclobalanopsis

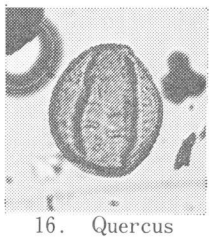


13. Betula

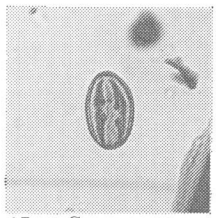
14. Ulmus-Zelkova



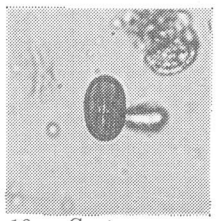
15.　Quercus



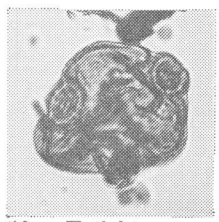
16.　Quercus



17.　Castanea
-Castanopsis

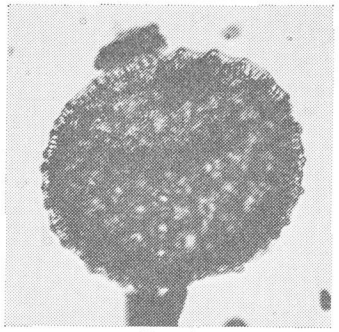


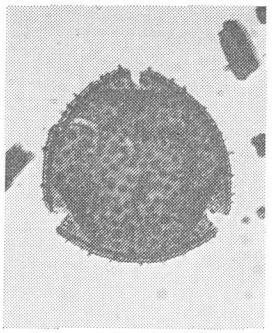
18.　Castanea
-Castanopsis

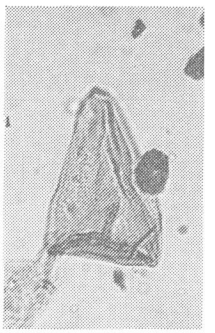


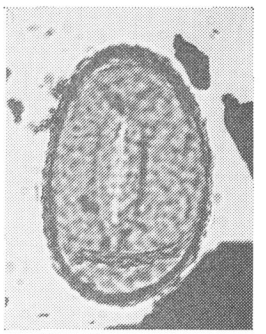
19.　Epilobiun
-Ludwigia

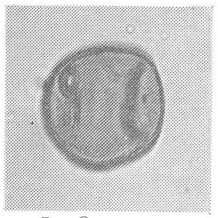
写真6　花　　粉　　(1)

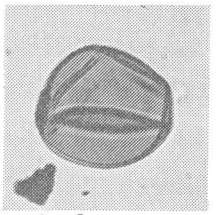

1. Persicarya


2. Lonicera

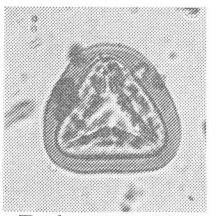

3. Cyperaceae


4. Monolate type spore

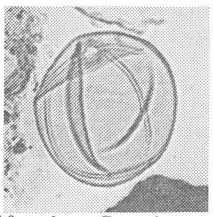

5. Oryza type

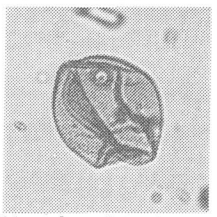

6. Oryza type

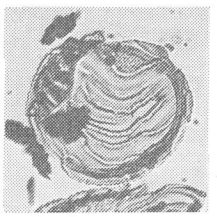
7. Artemisia


8. Trylate type spore

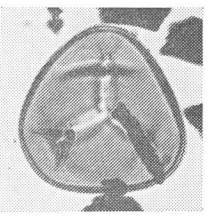
9. Monolate type spore

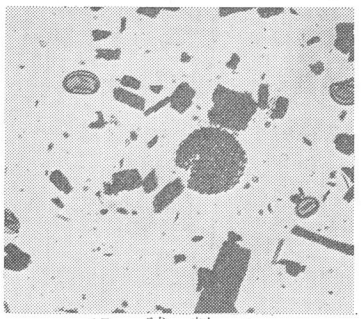

10. other Gramineae


11. other Gramineae

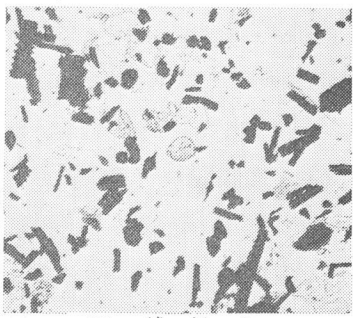

12. Celatopteris

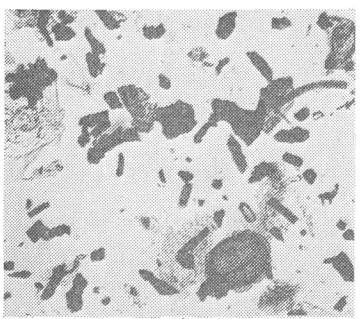
13. Celatopteris

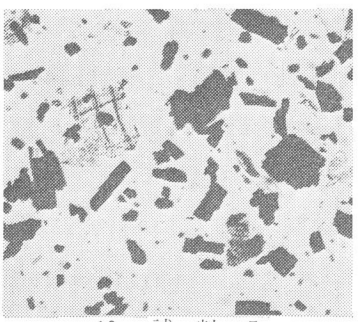

14. Trylate tyqe spore


15. 試　料　1

16. 試　料　2


17. 試　料　3


18. 試　料　4


19. 試　料　5

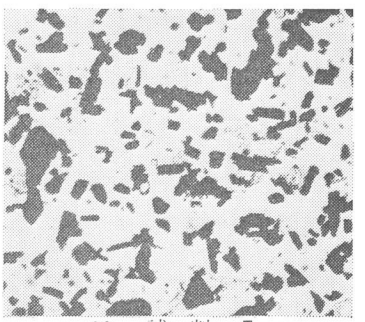

20. 試　料　7

写真7　花　　粉　　(2)

第7章　総　　括

奈良県内の縄文時代晩期の遺跡は，1973年までは，6か所であった。1983年には，17か所に増加している。ちなみに，近畿地方においても，調査の増加につれて晩期の遺跡も増える傾向にある。1980年現在大阪府54か所。兵庫県73か所。京都府16か所。滋賀県33か所である。

奈良県下の17か所についての内訳は，盆地内13か所。吉野川流域3か所。大和高原1か所となっている。石野博信氏が，「大和の弥生時代」(文献1)において，集成された縄文時代晩期遺跡は，大和盆地の南部に集中していた。また，これらの遺跡に近いところで，弥生時代前期の遺跡が立地することから，盆地南部から東南部にかけて稲作農耕が開始された，と論述された。

その後，約10年の間に，大和郡山市若槻遺跡，天理市和爾・森本遺跡，前栽遺跡などの盆地中部から北部，あるいは大和高原の都祁村東山遺跡(文献2)が知られるようになった。東山遺跡(文献3)は，弥生時代前期の土器も出土した。このような状況から，奈良盆地における，稲作農耕の開始地は，盆地東南部と，中・北部についても点在していることがうかがわれる。前栽遺跡の西側は，平等坊・岩室遺跡が立地している。この遺跡は，弥生時代前期から，古墳時代まで連綿と続く，いわゆる歴代遺跡群の一つである。今後の両遺跡の調査の進展によっては，縄文系の集落と，弥生系の集落が確認され，相互の文化接触の具体的内容が明らかにされるだろう。

前栽遺跡の縄文時代晩期の自然環境は，花粉分析によると，カシ類を中心とする照葉樹林帯が，植生を形成していたようである。この結果は，平城京跡における調査例，奈良盆地南部の植生の復原とも一致し，照葉樹林が，盆地にかなり広汎にわたって繁茂していたことがうかがわれる。

そして，河川内堆積土壌の分析では，イネ科花粉を，高率に検出したのは上層のみで，中・下層については，ほとんど検出されなかった。このうち，晩期土器の包含層である中層から，検出されなかったことにより，当遺跡での稲作の可能性は，留保しておきたい。

出土土器の全般については，第5章において詳述したとおり，土器の各部位の特徴から，縄文時代晩期の後半と考えられる。型式にあてはめると，口縁端部に刻み目を施す土器（深鉢 № 21）は，滋賀里Ⅳ式とみられる。外の土器については，おおむね船橋式から長原式の特徴をもつが。バリエーションが顕著で，一型式として考えることは，困難であった。このことについては，後述する。

また土器の中では，二枚貝調整による土器が存在することである（№ 7，№ 47)。二枚貝調整の

技法は，一般的に，晩期後半には衰退する技法であると言われている。(文献4)しかし，当遺跡では，調整技法として明らかに残っている。縄文伝統が強固であった証しであろう。類例を見ないものであり，資料の増加を待ちたい。次に，地域間交流を示す土器は，岩石の分析によって，紀ノ川流域特有の結晶片岩を含む土器が，3例検出された（№4，№29，№72）。№72は，縄文時代早期の土器である。堺市鈴の宮遺跡(文献5)においても，1点結晶片岩の小片を含む土器が報告された。また，№22の刻目突帯文には，伊勢湾地方において発達した，二枚貝による刻み技法がみられた。奈良県内では，橿原市橿原遺跡，(文献6)桜井市纒向遺跡から同様の刻目突帯文土器が出土している。また，深鉢№5などにみられる扁平な突帯文は，京都府から滋賀県にかけての遺跡に，類例に近いものがある。このような事例から，晩期後半にあっては，かなり広範囲の交流があったことが確認できる。そして，このことが，弥生時代の成立と，急速な伝播をささえる基盤になったものと思われる。

近畿地方の縄文時代晩期の土器研究は，1972年，滋賀県滋賀里遺跡の調査で，出土した土器により，この時期の編年の大枠が決定された。その後，家根祥多氏の「近畿地方の土器」(文献7)が発表されて，編年の細部についても修正が加えられ，新たに最終末の一型式として，「長原式」が設定された。本稿においても，同編年案や，大阪市長原遺跡を調査された松尾信裕氏の研究成果に負うところが大きい。後述するように「東大阪市における刻み目凸帯文土器について」(文献8)に示された編年案や，堺市鈴の宮遺跡における北野俊明氏らの見解(文献9)は，滋賀里Ⅳ式→船橋式→長原式という流れの中で，必ずしも土器が各細部において，一率に推移していないことがうかがわれる。当遺跡の土器も，大枠では船橋式から一部長原式を含む時期に比定できるが，問題を残している。この辺の事情を若干述べてみたい。

当遺跡の土器の内訳は，深鉢60片，浅鉢3片，壺12片である。器種別の構成比率は，深鉢80％，浅鉢4％，壺16％である。滋賀里遺跡では，Ⅳ～Ⅴ期は，深鉢・甕77.2％，浅鉢11.7％，椀5.8％である。長原遺跡では，深鉢90％，浅鉢4.4％，壺3.4％である。鈴の宮遺跡では，深鉢87.6％，浅鉢6.7％，壺5.6％である。これら4か所の遺跡を比較すると，全般に深鉢が優位を占めている。このことは，滋賀里遺跡では，晩期を通じて浅鉢の減少傾向に対して，深鉢が増加することが，指摘されている。また，4遺跡中，長原遺跡は，深鉢の比率が，際立って高い値を示すことが注意されよう。

次に，本稿第5章の遺物を説明するにあたっては，(1)形態分類，(2)突帯文の貼り付け方法，(3)突帯文の位置，(4)刻み目の施文方法の4項目にわたって分類を試みた。(3)，(4)については，鈴の宮遺跡，長原遺跡と比較してみた。

(3)突帯文の位置（A―口縁部よりやや下がる。B―口縁端部。B′―口縁端部に貼り付け，内面にも被さる。）前栽遺跡では，A―16％，B―54％，B′24％である。Aが古い要素として，B，B′が新しい要素と見られる。鈴の宮遺跡では，A―28％，B―72％である。長原遺跡では，A―7.2％，B―92.7％である。3遺跡では，長原遺跡のBがかなり高い値を示している。

(4)刻み目の施文方法（A—ヘラ状原体の端面で刻み，V字状を呈する。B—原体を斜位に押して刻み，D字状，小D字状を呈する。C—原体をねかせてなでる。あるいは，棒状原体の回転，押圧を利用する。O字，横長O字状を呈する。D—刻み目なし。）前栽遺跡では，A—21.6%，B—54%，C—26%である。鈴の宮遺跡では，21.2%，B—10%，B′—51.2%，C—16.2%，D—1.2%である。長原遺跡では，A—20.4%，B—48%，C—19.9%，D—11.3%である。刻み目の施文方法は，各遺跡ともBを中心として，バラエティーが見られる。これは一型式内での多様性をうかがわせる。また，長原遺跡では，Dの刻み目なしが10%以上になっている。

このように，器種の構成比，突帯文の位置，刻み目の施文方法などによる3遺跡の傾向は，前栽遺跡，鈴の宮遺跡と，長原遺跡では，少し異質である。前2遺跡では，バラツキが大きいのに対し，後者では，一方に高い値を示す。このことは，土器として，器種，形態など斉一性が強いことの表われであろう。このことを，逆に言えば，前栽遺跡，鈴の宮遺跡の土器について，さらに型式分類の可能なことも考えられる。しかし，鈴の宮遺跡の土器の出土状況は，

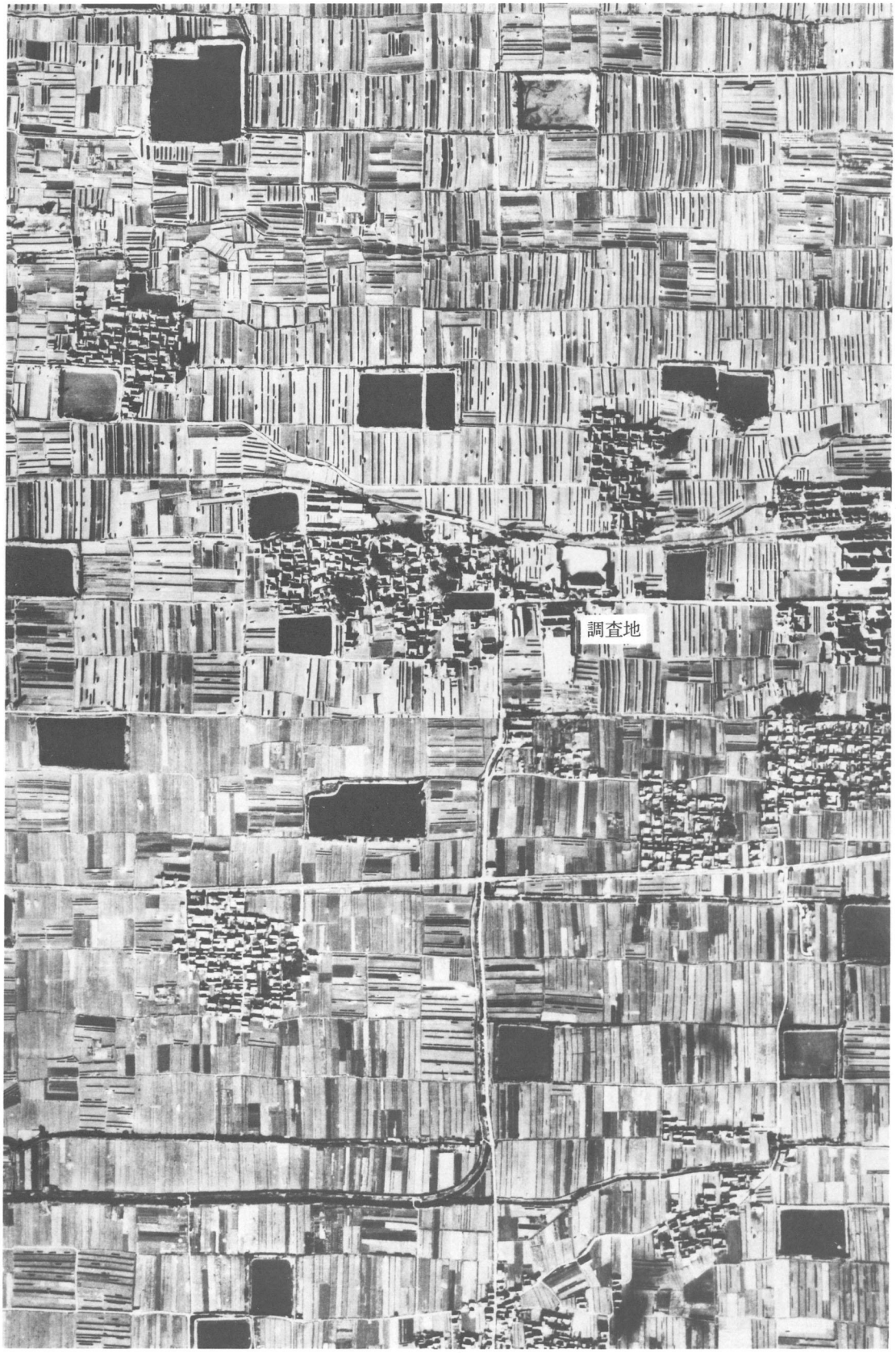
河道から出土した突帯文土器は滋賀里Ⅳ式の特徴をとどめるものから「長原式」と称される最も新しい土器型式までを含むと考えられる。層位的には滋賀里Ⅳ式の特徴をとどめる土器が，河道最下～下層から出土する傾向を指摘できるが，出土状態からみると長時間にわたる土器等の廃棄が行なわれたとは考えられず，時間的懸隔はそれ程ないと考えている。

とある。一方，前栽遺跡の土器の出土状態については，包含層を分層して取り上げることはできない状態であった。

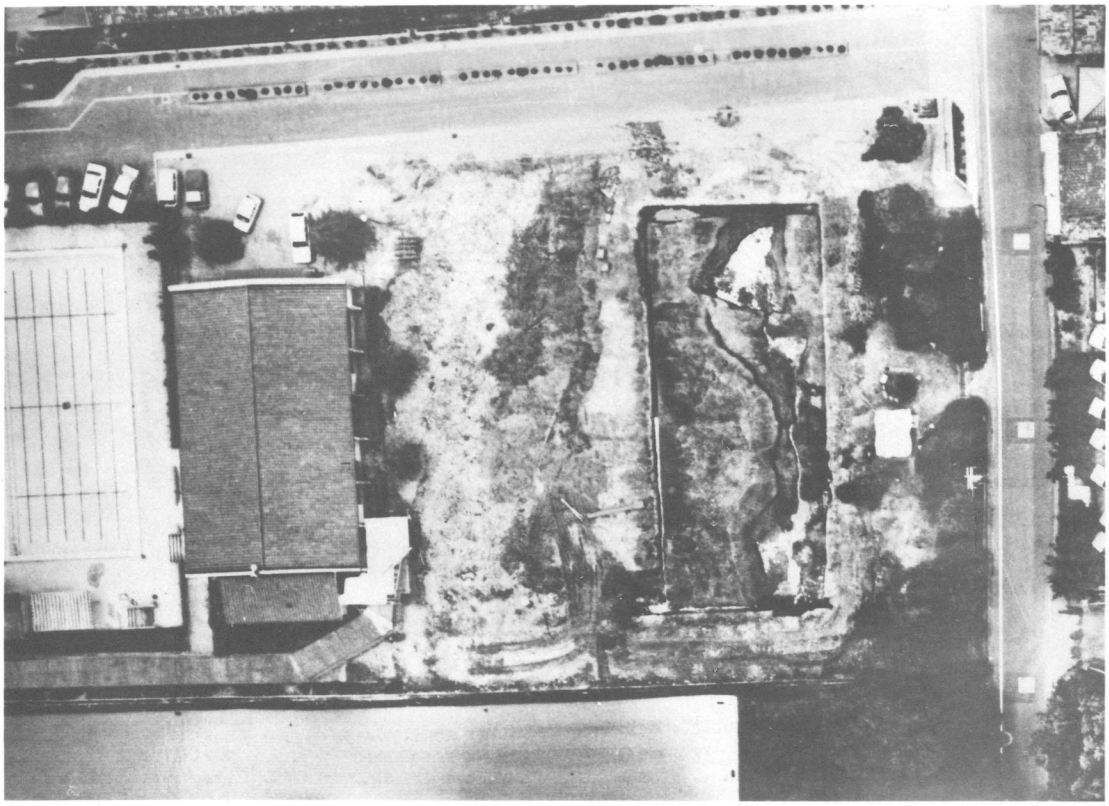
4遺跡の土器群について，若干の問題点を検討した。そして，縄文時代から，弥生時代に移行するこの時期にあって，斉一性の高い土器群を有する遺跡と，土器の個個にバリエーションがある，言わば縄文色の強い遺跡の存在することが考えられる。以上のような視点から，突帯文を貼り付け始めた，滋賀里Ⅳ式以降の諸型式について検討を必要としている。また，このことは，縄文時代晩期後半における稲作農耕の開始時期と連動したものとも考えられる。（了）

（参考文献）

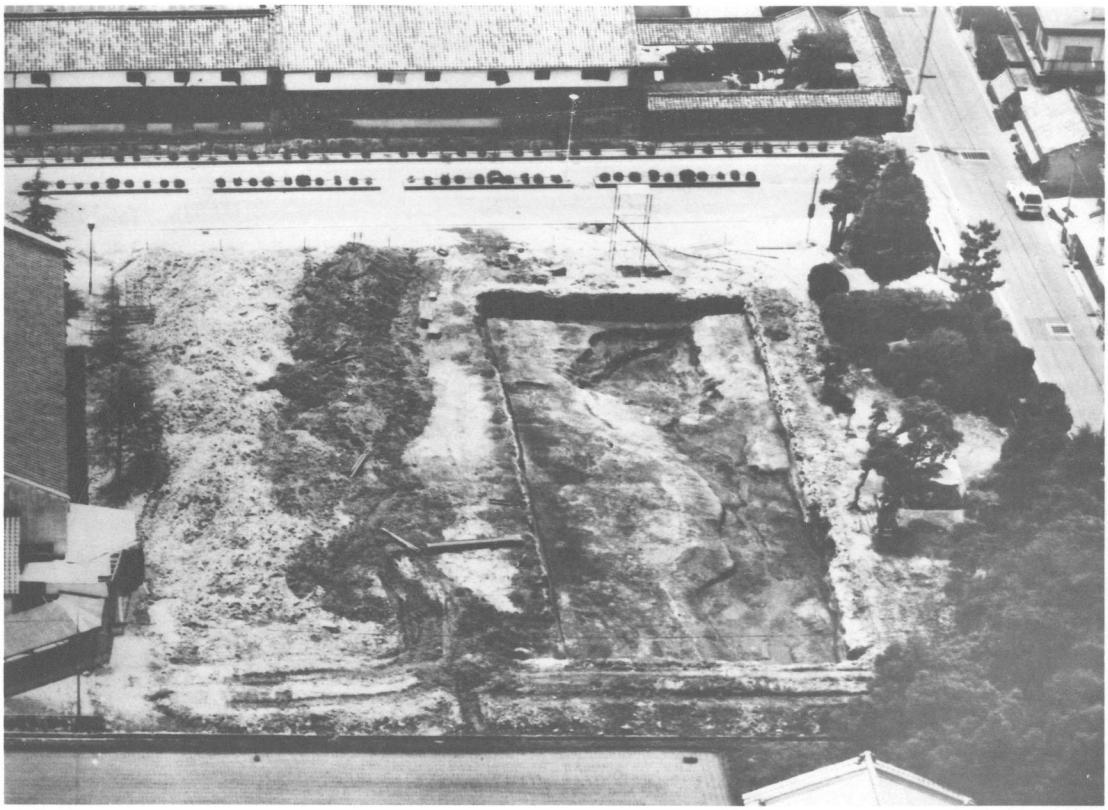
1　石野博信「大和の弥生時代」（『考古学論攷』第2冊）　1973
2　「大和を掘る」1982年度発掘調査速報展3　1983　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
3　岡崎晋明「都祁村友田で採集された土器）（「青陵」44号）　1980
4　加藤　進　丹羽裕一『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡調査団　1973
5　北野俊明「鈴の宮遺跡」（『堺市文化財調査報告　第11集』）　1983
6　末永雅雄「橿原」（『奈良県史蹟名勝天念記念物調査報告第17冊））　1961
7　家根祥多「近畿地方の土器」（『縄文文化の研究』4）雄山閣 1981
8　松尾信裕「長原遺跡出土の縄文土器」（「第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料」）1983
9　福永信雄　阿部嗣治「東大阪市における刻み目凸帯文土器について」（「西日本縄文文化研究会資料」）　1984



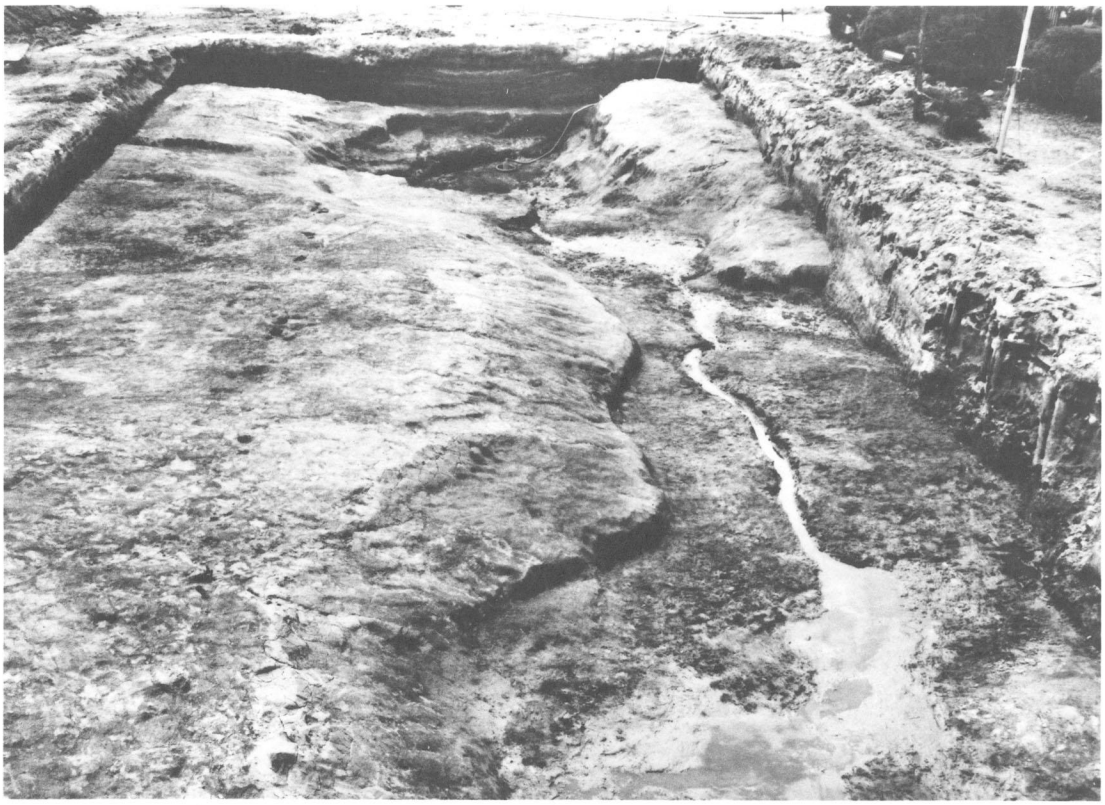
図版10　前栽遺跡　航空写真



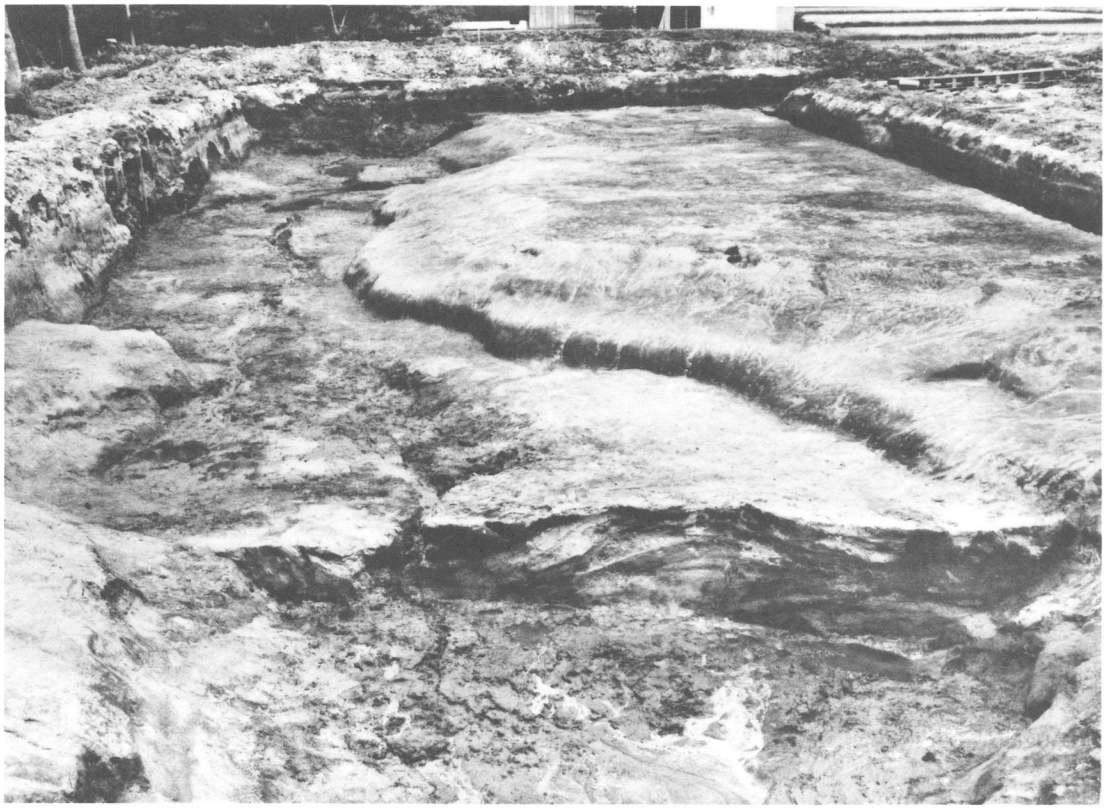
(1)　垂直遺構全景（↑西）



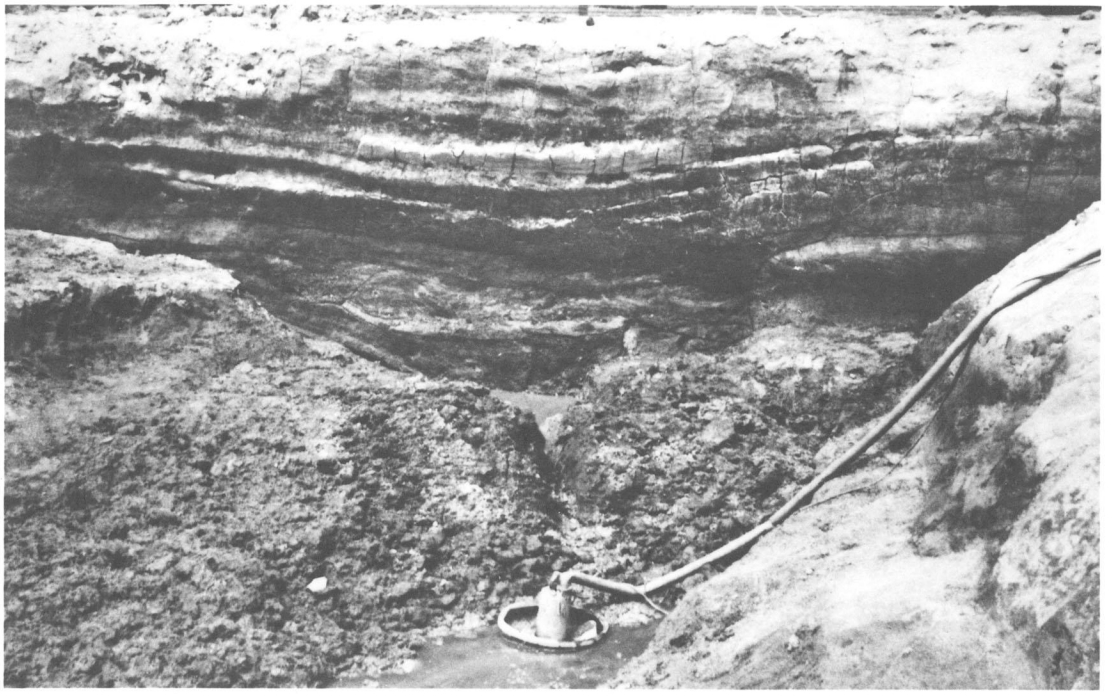
(2)　東方から見た遺構全景



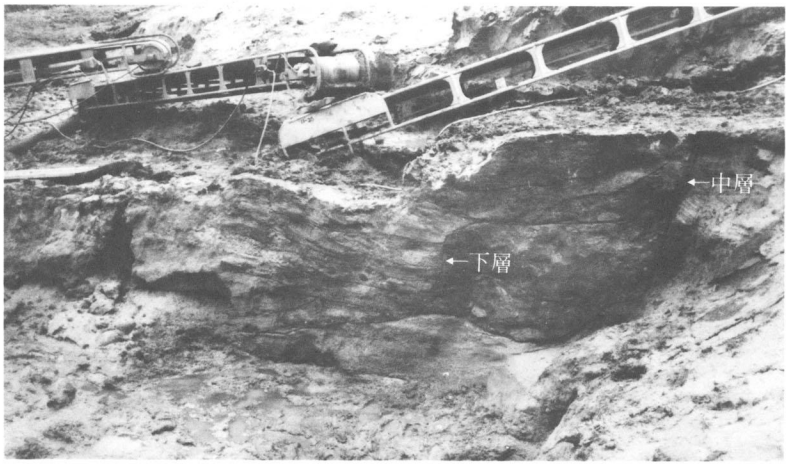
(1) 東方から見た河川跡



(2) 西方から見た河川跡



(1) 西壁断面土層



(2) 河川内堆積状況

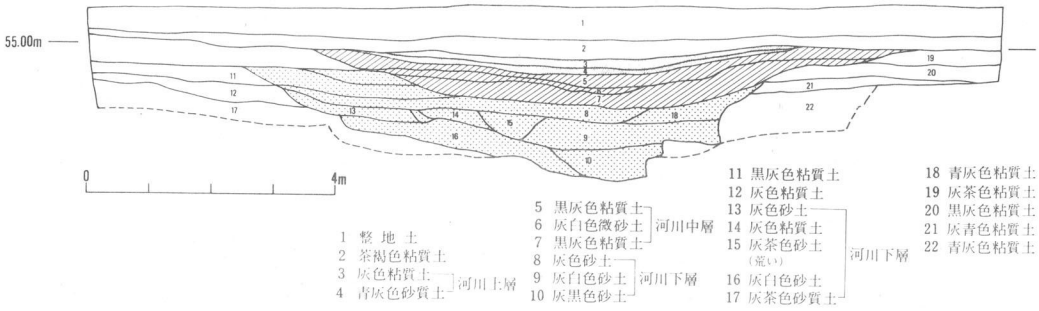


図10 河川跡(SDI) 西壁断面土層

昭和59年3月31日©
天理市埋蔵文化財調査報告　第1集
前栽（せんざい）遺跡
—縄文時代晩期遺跡の調査—

発行
編集　天理市教育委員会
天理市川原城町605番地

印刷　天理時報社
天理市稲葉町80番地